

日本圖書全集

藝州嚴島園云

安芸雲の國伊都岐嶋  
此大神の人の世と成て  
此島より天降海へ上  
り天降日嗣哉もの下を  
國の内をたつるを  
たつるのたつるあまの  
たつる

我々も此の如く時を待たず  
いふ所も其の如くしむる  
新法も其の如くしむる  
〜此の如くしむるは  
此の如くしむるは  
也川原乃中其の如くしむる

五柳堂  
二二  
國民  
常  
守  
守  
守

昔之遊心石上  
於此始知  
之世世如  
乃相子  
河之  
傳人  
若干  
姓  
業  
宗

あはし麻呂子孫書  
きんしんをいひて  
元をう治策の爲  
御寺河り時法心  
於皇土御門の大  
まゝの道の記を

東南地ぬる地ぬる  
いこの実なる一言を  
いこの地書の出来は  
ぬる地ぬる地ぬる  
に傳ふんはぬるぬる

洪兄

天保乙未孟春

久我前内大臣源通明公

慎思齋主人書



# 巖島苗會序

ことふけと六十あまり結くものうちなり。花のたねも  
——うたらし。月のこきり——海。水いふのはさま原野。  
もろくも結くやと結く。神のまじりの——こと  
社。佛のちのちのまじりや結く。はらひのまじりや結く。  
こと社を世のちのちのまじりや結く。目のはらひのまじりや結く。  
足のはらひのまじりや結く。はらひのまじりや結く。——

いさしきや。おま。柱をこ。柱をふらした。出来た。の。  
ぬる。おの。おま。や。う。お。人。この。為。う。ぬ。と。今。い。お。い。  
天。明。寛。政。の。の。後。玉。敷。の。都。誌。名。不。と。り。う。條。  
お。ま。ま。の。字。を。枕。を。と。枕。ひ。ら。く。糸。年。画。は。あ。う。  
ま。う。ま。う。つ。つ。お。ま。ま。の。と。ち。巻。を。つ。う。枕。を。年。の。  
より。大。和。河。内。き。能。ら。ま。り。ま。た。と。つ。た。く。ま。い。と。た。  
う。う。草。の。枕。結。つ。中。拂。ふ。い。も。う。た。も。た。く。と。お。

りぬる跡のあはれきつなきかぎり。うねる森の波は  
いふとれたもいもなきこと。ふ尋の産のみるおとせわ  
わきかろそそくたりぬきせ。いまが西の海までいれたよ  
いこうる城。安徳のよ人宮崎を意。いよもやうたも  
ひきこして。嚴島の番會つらうまわ。た志のあはれよ  
一城。たふとくまの傲人岡田清。うまもいふるよ。清。い  
と久うぶなひて。いよ。たのま城えんぐ。今のたもよ

ねを探り。いつまき読書ふあうき——つれど。なか  
たれつゝなだまもほれあれど。さうりたのれ  
がぬと。この書えびあは——と。たわわも弘  
弟〜家業〜もの〜う〜とれと。いひたをう。  
と家業。清も。之意も。うれとむし——かきとあな  
か。かぐらうき。いひたをう。いひたをう。  
中らひあはれ。たわわなだま。いひたをう。あ



愛たん人。事終るに事終る。事終るに事終る。事終るに事終る。  
都より事終る。事終るに事終る。事終るに事終る。事終るに事終る。  
——事終るに事終る。事終るに事終る。事終るに事終る。事終るに事終る。  
事終るに事終る。事終るに事終る。事終るに事終る。事終るに事終る。  
書。世の行の事終る。事終るに事終る。事終るに事終る。事終るに事終る。  
事終るに事終る。事終るに事終る。事終るに事終る。事終るに事終る。  
事終るに事終る。事終るに事終る。事終るに事終る。事終るに事終る。

たきしま事な久あ年あり之致。

と保七と皆とふと一様月

田中昔橋

伊都岐島國會序

百た良渙モいつよ志ま松よ。志のまりい海に

かる。云々カホい大神カミいも。いえまカミく表

穴アナよかカミい榮アキ天津神カミ祖カミの帝子ミコ達タチいし高。

大帝オホミカミ名ナ多タ石イシ上ノ古コい代ヨこの國クニ籍フミいもいち

ちチ遠トホく帝ミカミ徳トク多タ久ク方カタの天アメの照テルいと涼イヤさサいえエま

さかえ海ウミしてシテ不フかカまマ天下アマノカミタいもる玉タマ匣コト二ニい

なるナリ記キ名ナ不フなんナンある。いもるイモルぬ心ココロたき大宮オホミヤ祭マツルなる



考の故。うつせと水々の世より来るまは。それ詳よ  
あるを<sup>フミ</sup>書。ふもあなまのいりうのや口をしと。  
おもひつるまよ。おのれ清。その<sup>クヌチ</sup>國内より<sup>ニオウカニミ</sup>神徳を  
かゝりし。<sup>ヒメ</sup>神恩が<sup>メシ</sup>かゝりまほしくま<sup>トホ</sup>さ<sup>クニヒト</sup>さ<sup>クニヒト</sup>つ國人也。  
此大神は祓ふべきものあるもの。世のちりひよ。あが  
はらひて。えまうんぬ。それらが<sup>クニヒト</sup>おもひやりよも  
まの<sup>クニヒト</sup>神也。あな年此おもひおらして。此らま  
はらひらよま<sup>フミ</sup>さ<sup>フミ</sup>し<sup>フミ</sup>る<sup>フミ</sup>書。世よあなまを。せ

古今諸書イシロハイマのなりか。たゞ宮人ミヤヒト又はひを仰りて。  
先玉祿マサと大神の縁故ユヱより。下島春秋ハルニキ諸  
御祭祀オシヒツリの根元コトモトか。とら島内シマナカはありてあらむ。  
ら。さすも。すて。は。も。ら。る。は。巻マキくを。成ナい。て。  
藻塩モシホ子ホクサや。う。き。あ。つ。あ。ぬ。れ。き。な。ぬ。か。梨  
も。ら。せ。海。を。も。あ。も。お。回マり。ゆ。く。田中若梅の  
う。よ。を。仰オホり。は。る。子。菅スガの。根ネの。祿ルが。こ。ら。ぬ  
正ただして。あ。る。を。し。る。を。藻屑モクツの中ナカに。ま

えつる<sup>コ、チ</sup>地<sup>チ</sup>を<sup>キ</sup>す<sup>リ</sup>の<sup>ヨ</sup>い<sup>ハ</sup>ぬ<sup>キ</sup>地<sup>チ</sup>書<sup>フ</sup>を<sup>キ</sup>の<sup>チ</sup>の<sup>チ</sup>ち。  
千里<sup>チ</sup>の<sup>チ</sup>外<sup>ト</sup>四<sup>シ</sup>方<sup>ホ</sup>の<sup>チ</sup>境<sup>サ</sup>よ<sup>シ</sup>ゆ<sup>ホ</sup>い<sup>シ</sup>り<sup>テ</sup>人<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>ぬ<sup>ル</sup>の<sup>チ</sup>  
よ<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>み<sup>テ</sup>。あ<sup>リ</sup>た<sup>リ</sup>大<sup>ニ</sup>神<sup>ノ</sup>の大<sup>ニ</sup>神<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>保<sup>ル</sup>ゆ<sup>ニ</sup>急<sup>ニ</sup>を<sup>シ</sup>た<sup>リ</sup>と<sup>シ</sup>て。  
屋<sup>ノ</sup>つ<sup>カ</sup>り<sup>テ</sup>何<sup>レ</sup>か<sup>キ</sup>ん<sup>ヲ</sup>結<sup>ス</sup>を<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>モ</sup>。な<sup>リ</sup>あ<sup>リ</sup>か<sup>シ</sup>。

天保<sup>ニ</sup>と<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>る<sup>ニ</sup>年<sup>ノ</sup>十<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup> 出<sup>テ</sup>田<sup>ノ</sup>清

凡例

嚴島ハ兼雨もる小島なりといへども本社の壯麗より始名區佳境の故に  
山水凡光の優なる他無比類をべき處をさくあることを一故に今この書は縮  
めて凡島の因縁をそのハ領細も漏さば真景を写して面を設け實録を  
考へて事を記し看官をして眼前に瞭然とせしむ

草創より以來多有餘年の鳥免を徑り時世の盛衰小志をかひ或ハ祝融の  
災ハ荒蕪一或ハ兵亂の害小移變せるもの多し然もしもさか海中小屹  
立として陸地も依らば隔たりまれを故につく災害は適して沿革を知らる  
ものももるな記あるは面を按して説ふべし

面中間く人物の大面を出せるが沖ハ怪談奇話な記もあはれとこ  
古書小徴もまれに妄なりといふへくはきましく大經堂の檣樟の故の如きは  
疑はれも似たまども里老の口碑既ハ久しらく強ち拾へき故に載せて凡  
童の欠伸を慰ま

島外といへども地味前速田社大頭社官殿江誓願寺田所氏などの記

由緒あるかまりの悉く載たり

書畫ハミな姓名印章を載てその人をあつらひり姓名印章な記ハ峻峯齋守嗣の筆のとなり

島内諸社の祭礼及禱祀の故事などを六卷五小年中行ると題して別小挙たり地味前以下島外の例祭ハ一社々々の部下記をり

又倉小藏も宝物ハ別小冊にて五冊はな一後篇とせり

齋小道芝記の作ありといへども書畫少た記がゆゑ亦地を履する人比ま

免小眼を愧ハ一むふ至るに涉獵たるはるかゆ名事跡を索る人の為

小益あることば「これなよう」て此度の挙ハ日本紀古事記等の古書と更

小もいと次野史牌官ふいへるまで勉免て攝となることハ本文をその倭

子載を聊も私意の添削を加へざるものなり

この書編集の七一本より故實の正誤をたし是非の倭削をくへつるものハ本藩の頼惟系加藤景綱周防の田中若樹なり

# 嚴島圖會目次

## ○本文之部

本卷之一	本卷之二	納經堂	香法樓	轉法輪藏	龍宮界藏	牛王社	奉行屋敷	鐵鳥居	脇浦	有浦	尼洲	圓城院	道成山無量壽院神泉寺	華降山以八寺光明院	谷原	谷堂	中藥師堂	鳥居松岡	人居松岡	人中鷹社	中間藥師堂	
元	二	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
納經堂	香法樓	轉法輪藏	龍宮界藏	牛王社	奉行屋敷	鐵鳥居	脇浦	有浦	尼洲	圓城院	道成山無量壽院神泉寺	華降山以八寺光明院	谷原	谷堂	中藥師堂	鳥居松岡	人居松岡	人中鷹社	中間藥師堂			
道祖神社	北藥師堂	寶光院	本尊十一面觀音	龍上山西方寶壽院	福壽院	廢愛染院	神力寺	大神力寺	廢龍翔寺	新銘谷	摺鉢谷	存光寺	演役所	町役所	份會所	宮尾城	今伊勢神社	休堂				
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	

鷹	千	獻	包	包	火	櫻	金	杉	杉	江	姥	蓬	聖	蛭	長	西	搖	角	蛭	池	小	仁	
巢	獻		浦 神		辰			浦 岡 神					萊	子		卷	行	佛	子			王	
浦	岩	浦	社	浦	口	川	水	社	浦	浦	懷	巖	崎	社	濱	之	返	岩	堂	社	浦	浦	門
																三							

一五	一五	一五	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	
棟	桃	早	革	山	山	養	養	關	陶	牛	青	青	山	比	比	藤	楷	伊	腰	腰	下	上	鷹	
木	木	咲	籠	白	崎	父	父	伽	全	王	海	海	伏	目	目		木	豫	細	細	居	居	浦	
浦	浦	櫻	崎	社	濱	社	崎	末	死	所	社	社	浦	返	石	崎	浦	浦	松	社	浦	濱	濱	社

三五	三五	三四	三四	三四	三四	三三	三三	三三	三三	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三一	三一	三一	三一	三一	
蛭	鯛	江	鱈	踏	鴉	室	內	只	大	大	牛	御	御	猪	新	須	牛	須	須	長	阿	下	江	
子			繭					侍	穀	江	川	王	浦	床	子	贅	屋	王	屋		多	り		
社	浦	浦	浦	浦	浦	浦	浦	浦	浦	浦	浦	浦	浦	浦	浦	浦	浦	浦	浦	浦	浦	浦	浦	浦

三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七	三三七
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

陶全姜陣所	廢多寶院	多寶塔	廢連乘坊	地藏院	華藏院	神藏院	西院	經の風	石風爐	廢眞珠院	十眞王堂	廢仙藏坊	あせ山	道祖社	橋山	大元社	大元浦	泉光院	大藏坊	龜居山大願寺	寶泉院	預葱坊	淺葱樓
-------	------	-----	------	-----	-----	-----	----	-----	-----	------	------	------	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	--------	-----	-----	-----

二七〇	二七〇	二六九	二六九	二六八	二六八	二六八	二六八	二六八	二六八	二六八	二六八	二六八	二六八	二六八	二六八	二六八	二六八	二六八	二六八	二六八	二六八	二六八	二六八
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

荒神堂	長樂寺	松樂坊	東泉坊	執行坊	修善院	多聞院	西提院	菩向院	影染院	愛福院	增燈坊	龍燈院	龍燈院	瀧本坊	瀧山水精寺	若宮原	以中庭	四葉宮	紅葉谷	廢瑞光寺	南風爐	大湯屋	行宮
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-------	-----	-----	-----	-----	------	-----	-----	----

二六九	二六九	二六九	二六八	二六八	二六八	二六八	二六八	二六八	二六八	二六八	二六八	二六八	二六八	二六八	二六八	二六八	二六八	二六八	二六八	二六八	二六八	二六八	二六八
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

力灌石	岩屋藥	中藥	幕幸	御糸	白染	愛染	龍宮	祈不動	火消不動	大師堂	經地塔	石地藏	神地	彌卷之	廢永元寺	牛王社	若江藥師	中江藥師	弘中戰	棚守將監屋敷	瀧藥師	瀧藥師	瀧藥師
-----	-----	----	----	----	----	----	----	-----	------	-----	-----	-----	----	-----	------	-----	------	------	-----	--------	-----	-----	-----

四

二六九	二六九	二六九	二六九	二六九	二六九	二六九	二六九	二六九	二六九	二六九	二六九	二六九	二六九	二六九	二六九	二六九	二六九	二六九	二六九	二六九	二六九	二六九	二六九
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----



伊勢遙拜所	虛空藏堂	大威德明王堂	文珠堂	鐘撞堂	毘沙門堂	岩屋不動堂	聖天現堂	白山大觀音	十一面觀音	頂上觀音	龍燈石	六地藏	四所明神遙拜所	湯殿山神所	地御前遙拜所	疥癬阿彌陀	札乞阿彌陀	目洗藥師	滿干岩	船干岩	覺鑊岩	大日堂	二王門
-------	------	--------	-----	-----	------	-------	------	-------	-------	------	-----	-----	---------	-------	--------	-------	-------	------	-----	-----	-----	-----	-----

三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

朝日觀音堂	龍馬窟	繪馬窟	三劍窟	龍馬場	荒神社	善女龍王社	飛不動堂	十不王地	水手向地	日輪觀音堂	彌勒觀音堂	奧院大師堂	三鬼堂	曼陀羅石	玉取岩	關伽井	時雨櫻	瓶華柏	錫杖梅	求聞持堂	荒神社	熊野權現社	行者藥師堂
-------	-----	-----	-----	-----	-----	-------	------	------	------	-------	-------	-------	-----	------	-----	-----	-----	-----	-----	------	-----	-------	-------

三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

四日楊枝献上	同日寶藏開	同日兩宮御供	同日神樂始	同日大元御供	同日巳刻兩宮御供	同日大元御供	同日巳刻御供	同日卯刻御供	同日御簾捲	元日御衣献上	元日正月	卷之五	府中上卿田所氏	角振社	惣幣社	官幣社	大瀧大明神社	天瀧大明神社	大瀧大明神社	速田大明神社	地御前社	夕日觀音堂
--------	-------	--------	-------	--------	----------	--------	--------	--------	-------	--------	------	-----	---------	-----	-----	-----	--------	--------	--------	--------	------	-------

四〇六	四〇六	四〇六	四〇六	四〇二	四〇二	四〇二	四〇二	四〇二	三九六	三九六	三九六	三九六	三六六	三六六	三六六	三六六	三六六	三六六	三六六	三六六	三六六	三六六	三六六	三六六
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

同日御手斧始  
 五日禁裡御祈禱  
 七日大元社七種神樂  
 同日兩宮御供  
 同日御弓始  
 十五日御簾下  
 十六日兩宮御供  
 十七日管絃講  
 十八日法華會  
 二十日百手射  
 廿五日連歌會  
 二 月  
 朔日仁王會  
 未日夜祭  
 初申日御祭  
 酉日御祭  
 同日法華八講  
 彼岸講  
 三 月

○挿畫之部

嚴島全圖表一  
 表二

二二三  
 四一五

同

表三  
 表四

六一七  
 八九

同

裏一  
 裏二

二〇一  
 三二三

四〇六	上巳兩宮御供	四三	十八日御洗	四八
四〇六	十二日御簾捲	四三	八 月	
四〇六	十四日試樂	四三	九 月	
四〇六	十五日夜大宮祭	四三	九日兩宮重陽御供	四八
四〇六	十六日法樂神能	四三	十二日新嘗御供	四八
四〇六	十八日御簾下	四三	十四日大宮祭	四八
四〇七	四 月	四五	十 月	
四〇七	六日法華會	四五	十一 月	
四〇七	五 月	四五	中日鎮座祭	四九
四〇七	端午御供	四五	十二 月	
四〇七	六 月	四五	八日引聲	四九
四〇七	八日最勝講	四五	十七日法華會	四九
四〇七	十七日夜船管絃	四六	廿五日御衣縫	四九
四〇七	七 月	四六	晦日山伏	四九
四〇三	七日御虫干	四六	日別御供	四五
四〇三	同日兩宮御供	四九	月次御燈	四五
四〇三	十四日夜延年祭	四四	補遺	
四〇三	同夜延年舞	四四	神 鹿	四五
四〇三	十六日十七日兩夜多賀江念佛	四五		

同 裏三	一四一五	御笠濱暮雪	九六一七	以上上人說法之圖	一五一五
同 裏四	一六一七	鏡池秋月	九八一九	谷原	一六一五
同 裏四	二〇一三	康賴卒堵婆の圖	一〇一〇三	谷原麋鹿	一六一五
全 圖	二六二七	平判官康賴寄附燈籠の圖	一〇五	中間谷	一六二五
清盛靈夢の圖	三〇一三	九月二十三日山王祭之圖	一〇八二〇九	鳥居松	一六四一五
本社客人社	三〇一五	千疊敷五層塔轉法輪藏	二〇一三	稱名庵北藥師	一六
同 其二御笠濱	三〇	大經堂より眺望の圖	二〇一三	寶光院	一六
本藩加藤氏所藏宮蓆貝の圖	三〇	大經堂の由來	二〇一九	寶珠院	一七〇
大鳥居の圖	四〇四	有 浦客船	二〇一三	福壽院	一七
大鳥居類表	四〇四	有 浦客船	二〇一三	大佛原	一七一
同 裏	四〇四	六日市立の圖	二〇一三	新町	一七一
大鳥居類額	四〇四	歌舞伎芝居の圖	二〇一三	今伊勢社存光寺	一七一
繪馬を觀る圖	四〇四	金鳥居辻君の圖	二〇一三	御湯立の神事	一八一
高倉院御幸の圖	四〇四	金鳥居	二〇一三	宮尾城合戰	一八一
同 其二	四〇四	塔岡楊枝店	二〇一三	小浦	一八一
同 其三	四〇四	同 其二	二〇一三	長濱蛭子社	一八一
佐藤近宗實定卿に嚴島詣をす	四〇四	寶泉院	二〇一三	聖崎	一八一
ゝむる圖	四〇四	圓城院神泉寺	二〇一三	嚴島海上蓬萊	一八一
西八條殿にて内侍清盛公に對	四〇四	光明院	二〇一三	鳥廻茅輪の圖	一八一
面の圖	四〇四	二位法尼肖像	二〇一三	杉浦神社	一八一
豐臣太閤御社參の圖	四〇四	女旨法印郭公を聞たまふ圖	二〇一三	包浦神社	一八一
西行法師名所舊蹟を歴遊	四〇四		二〇一三	鷹巢浦神社	一八一
社頭の明燈	四〇四		二〇一三	腰細浦神社	一八一
本地堂寶庫	四〇四		二〇一三		二〇一三

青海香浦神社の圖

三三二二三

陶全差敗死の圖

三三六二二七

養父崎神社

三三〇一三二

山白濱神社

三三二一三三

須屋浦神社

三三六二二七

御床浦神社

三三六二二九

須屋浦にて餡餅の餐を行ふ圖

三三〇一三一

實定卿の御前において有子内侍琵琶を弾く圖

三三四一三五

網の浦姪子社

三三八一三五

反橋觀花の圖

三四一三四

大願寺

三四六二四七

鐵釜横堅石

二四八

大元神社

二五〇

同 其二

二五一五二五

大元櫻花

二五二一五五

經屋地藏院十王堂

二五八一五九

神既多寶塔

二六〇一六二

紅葉谷以中庵四宮

二六二一六三

紅葉谷納涼

二六四一六五

社僧菩提院、愛染院増福坊、

二六八一六九

龍燈院瀧本坊

二七〇一七二

同 其二大聖院

二七〇一七二

豐關白大聖院に於て和歌御會の圖

二七四一七五

社僧西方院、修善院、執行坊、

二八〇一八二

東泉坊、多聞坊

二八二一八三

同 其二

二八六二八七

瀧の薬師

二九〇

中江薬師

二九四三〇九

寫彌山佳景

三〇〇三三一

彌山開基の由來

三〇四三三五

彌山神鴉

三〇八三三九

瀧の宮白糸の瀧

三〇一三三二

高倉帝白糸の瀧散覽の圖

三〇三三三三

二王門

三〇四三三五

彌山全景

三〇六三三九

求聞持堂

三〇八三三一

平宗盛寄附鐘銘

三〇九三三二

曼陀羅石

三一三三七

三鬼堂

三一四三三一

奥摩院

三一五三三一

護摩院

三一六三三一

龍馬場合戦

三一七三三一

地御前社

三一八三三一

同 其二

三一九三三一

地御前五月五日祭

三五六一七五

同 其二

三五八一七九

同 其三

三六〇一八二

速田社

三六四一八五

大頭大明神

三六八一九九

大野の瀧

三七二二〇三

神馬献上

三八八一九九

元日御衣献上圖

三九二二〇三

若潮

三九四一九五

内侍

三九七

正月五日舞樂圖

四〇〇一四一

伏兔糰餅圖

四〇三

楊枝献上圖

四〇四

龍燈

四〇五

御湯立の圖

四〇八一四九

天滿宮毎月連歌會の圖

四一〇一四二

能舞台の圖

四二二一四三

遊女能を觀に出る圖

四六六一四七

六月十六日夜廣島本川口の圖

四七〇一四三

御供船川口を出る圖

四八二一四九

六月十七日夜管絃の御船地御

前より遷幸の圖

同夜海上光景

同 其二

紫雲山誓願寺

七月十四日夜延年祭

同 其二

多賀江念佛の由來

初申神事

秋の鹿

晦日山伏

四〇—四一

四二—四三

四四—四五

四六—四七

四八—四九

五〇—五一

五二—五三

五四—五五

五六—五七

平相國清盛公書

一區據孤洲之巖  
岸四面臨巨海之  
渺茫

# 巖島全圖表一

いづくもまげへつたて

安藤のらる人未田

芦磨がもとよりかの

園のいつくまの畠

のどんけくうれこ

るをたけうらそをて

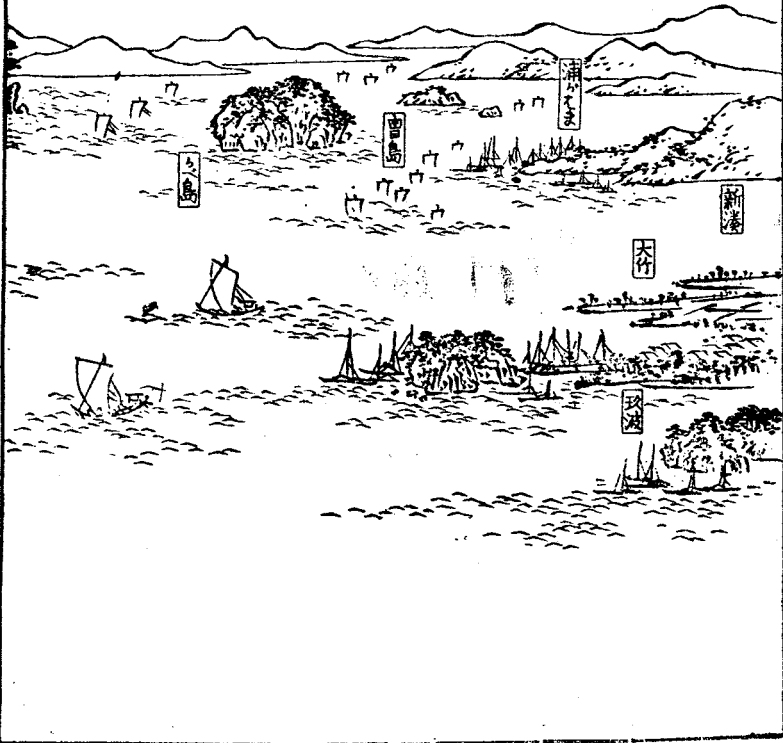
幸願直長

免のらるんぬ

らちていつたま

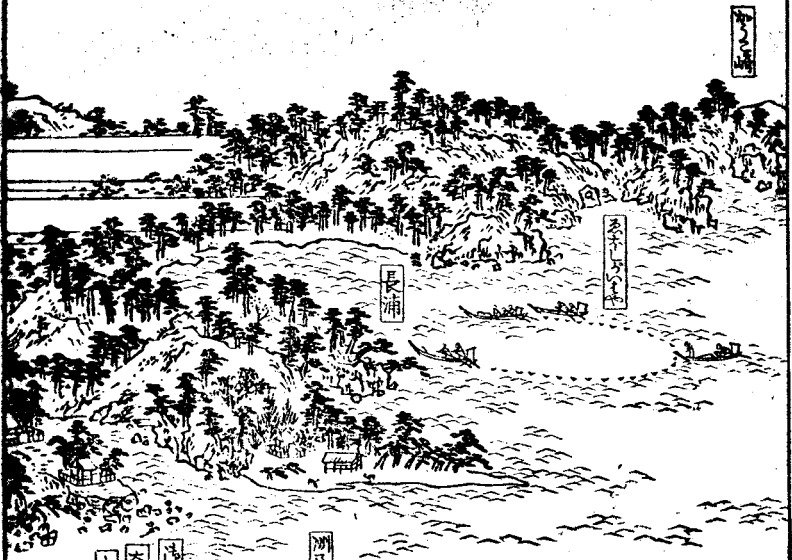
いつまぬんと

たむらうつし繪



彩舟衝尾，倚汀沙。  
 隱映仙山五色霞。  
 壩內潮回廊九曲，  
 街頭鹿狎市千家。  
 諸平威，終悲黃土，  
 二帝宸遊，想盟華，  
 懷古何人同此意，  
 四隣歌吹徹宵譁。

茶山



洲尾社  
 山白波  
 三十二丁

大川  
 浮麻社  
 大浦  
 內...



表二



約八景

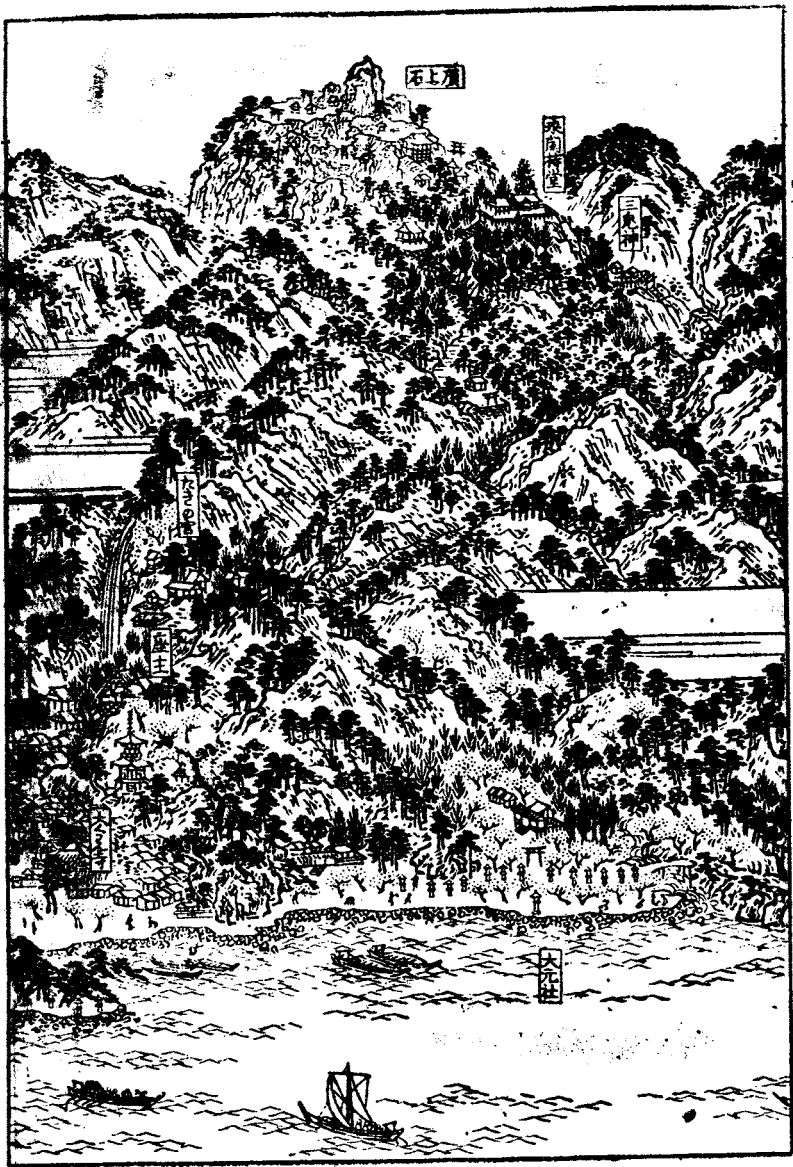
柳の浦

於此山  
大なる  
いふ  
木

乃ら

室深

李下  
深



表三

題嚴島真景

為藝府賴文與字

黃玉表浸碧海浪金

榜御題射蒼宮君

不見神人鋸斷須弥

羊移而置之蓬萊東

變幻萬狀搖未定翻若

杉雲泛春空中搏靈妃



市杵媿紫貝之關水晶宮。

君臣遭遇其所賞。香花奔頰

傾萬疾。余亦夢。夢。到。珊瑚室。

鞭策白龍。僊鹿神鴉相後先。走余飛。

度百尺虹。響屨廊驚。遂初覺。百八珠燈。

波底紅寅夜。媿達瑤階下。仰歎大闢問。

控々凶逆不臣。平相國。義弘元就底。蟻

蟻。不知神明何所眷。福祐擁護如許隆。

余有神策萬餘言。一言而可以興邦。東說

西說。古已爛。君相不省。愛如龍。衰朽寒

餓非所顧。報國思効。消埃志。聰明正直

如不昧。回首一為照。丹衷。銀鑲。長刀今

安在。何惜。暫時借。堯翁。哀歡十聲。寂

不答。恍然骨慄。朦朧中。賴家真箇誰。處

得。一々與。燕。所見同。對之猶疑。魂未返。如聞

空際。曼曉風。

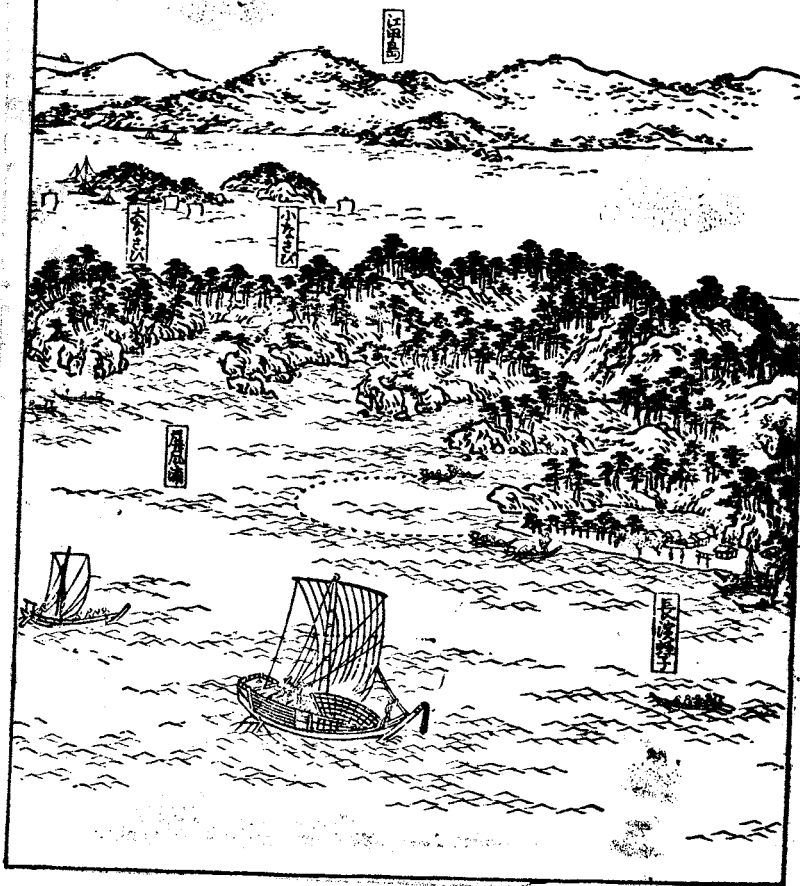
柴邦茂

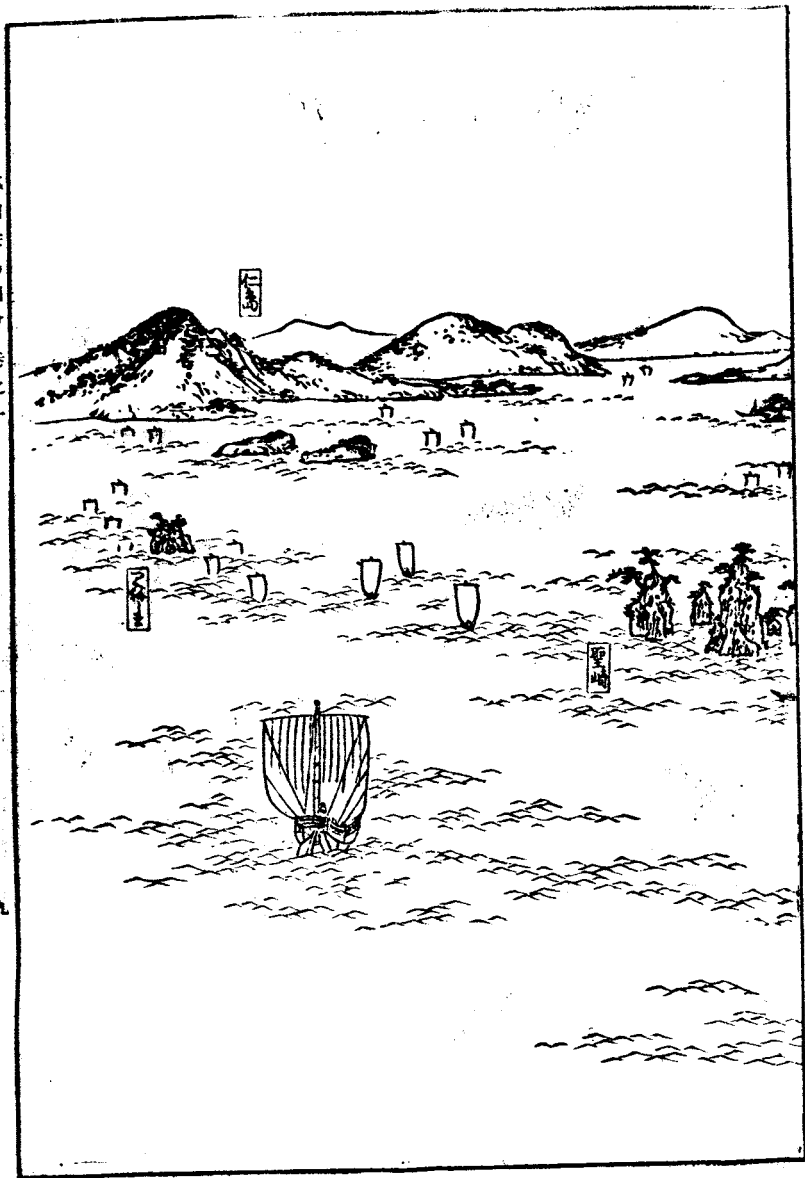


表四

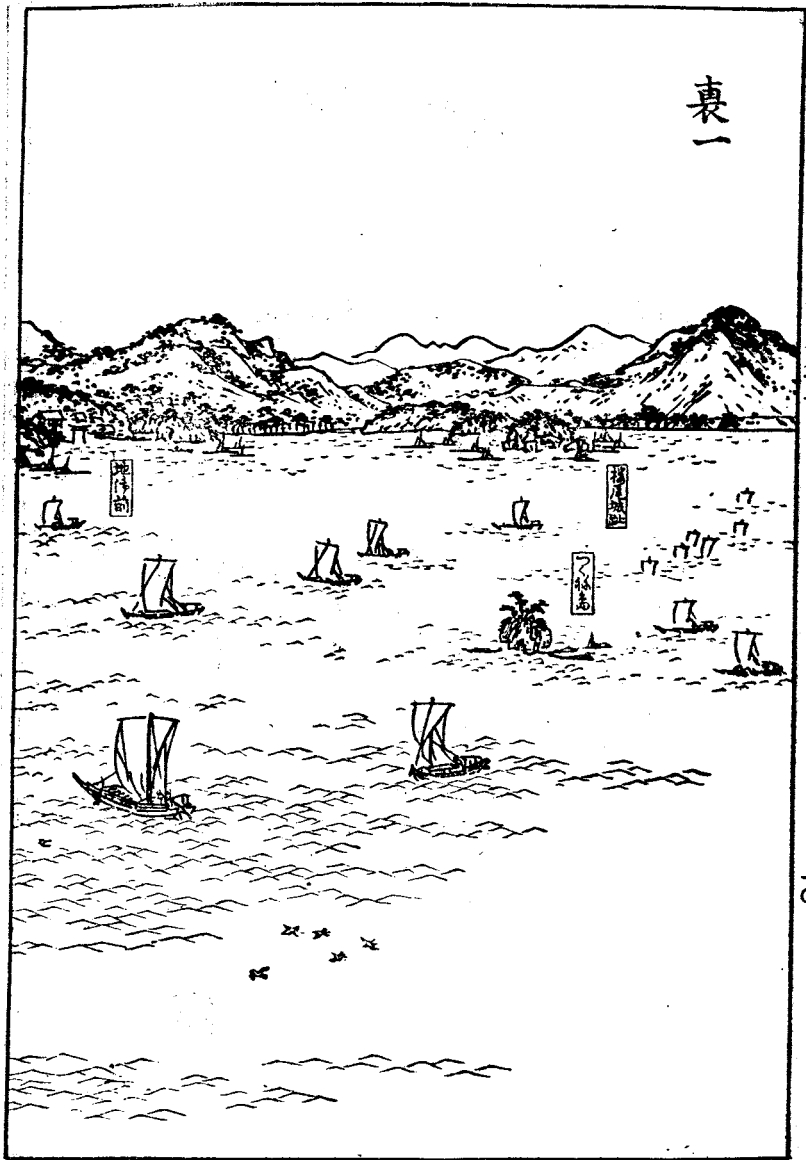
神山綠渺小蓬萊  
七浦風烟與海開  
今古精煙無幾馳  
闕官時進紫霞杯

寺田臨川





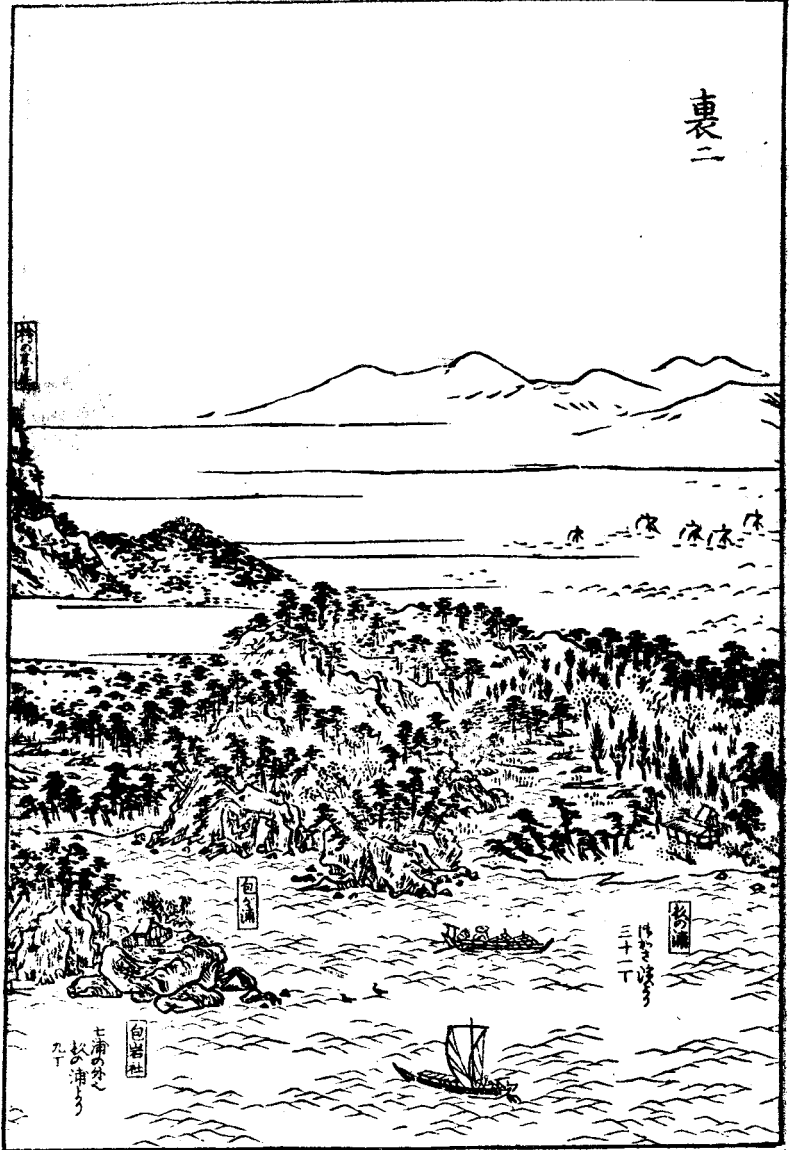
裏一







裏二

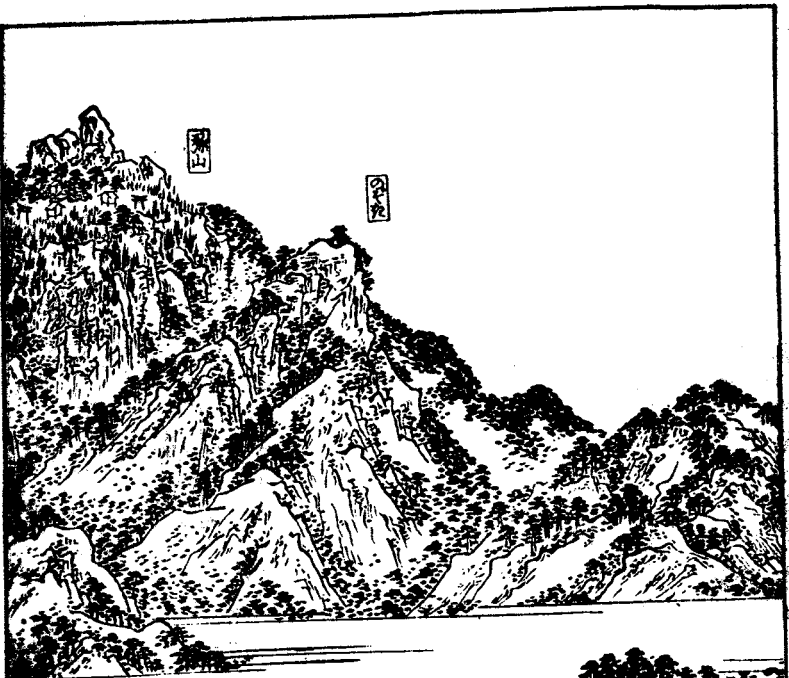


杉の浦  
舟の浦  
三十一丁

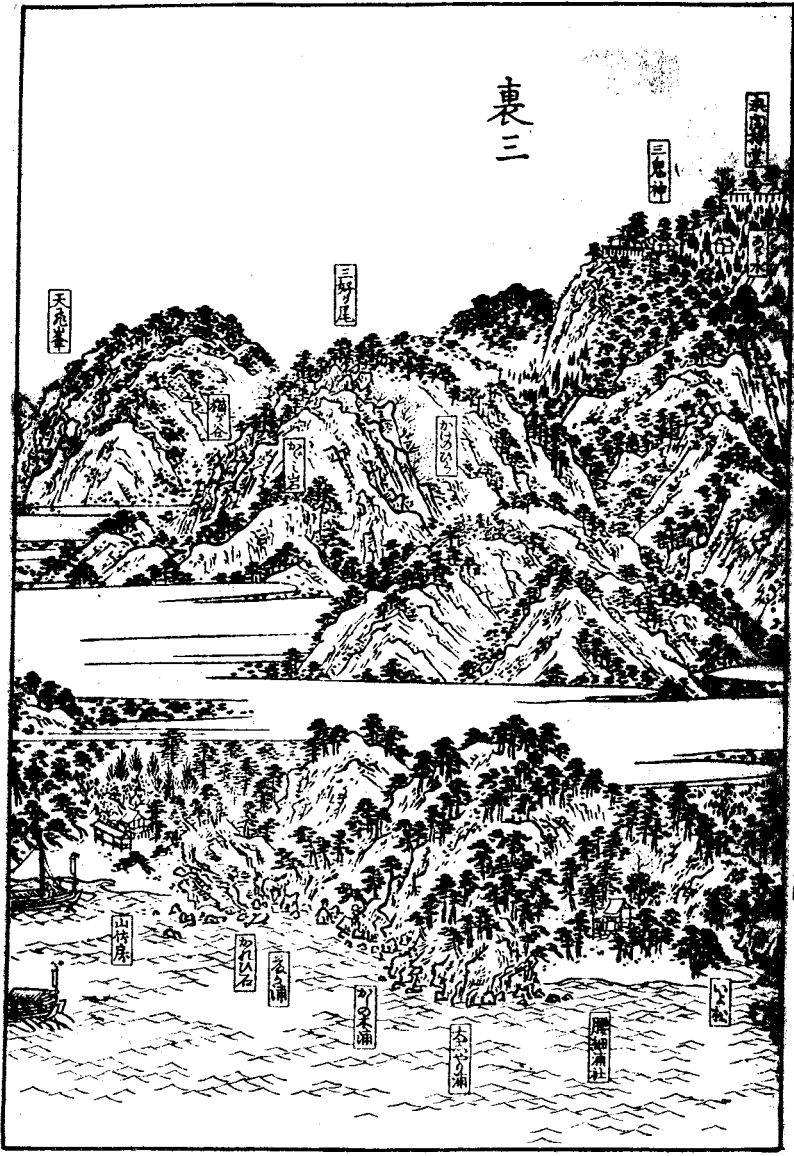
白瀬

白岩

七浦の外  
松浦  
九丁



裏三



天虎峯

三好峯

三好神

三好寺

海峯

三好峯

三好峯

山竹房

山竹房

山竹房

山竹房

山竹房

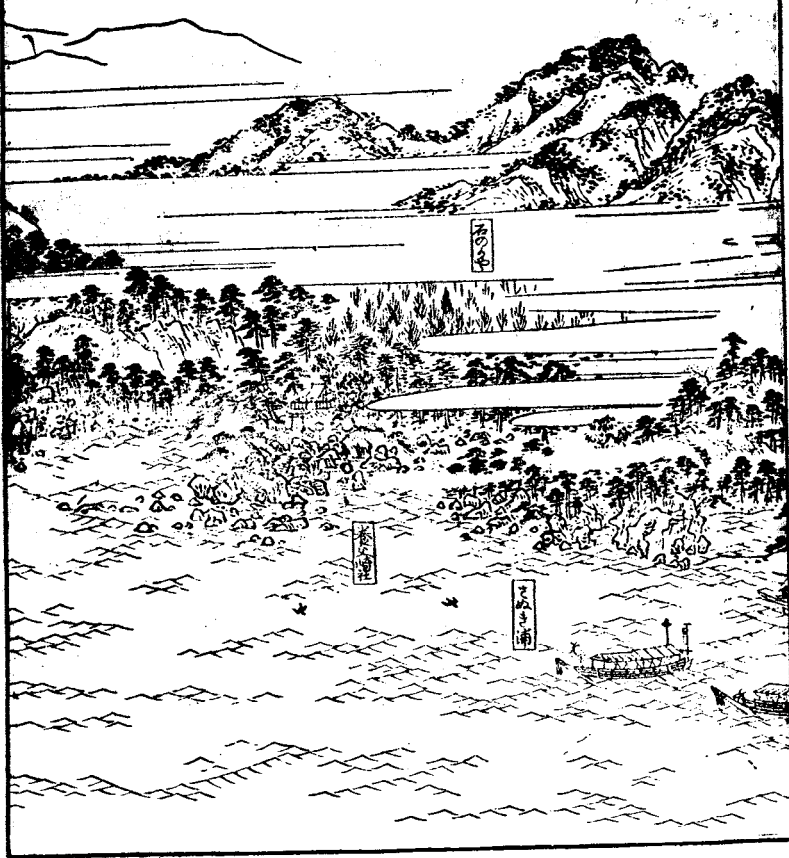
山竹房

山竹房

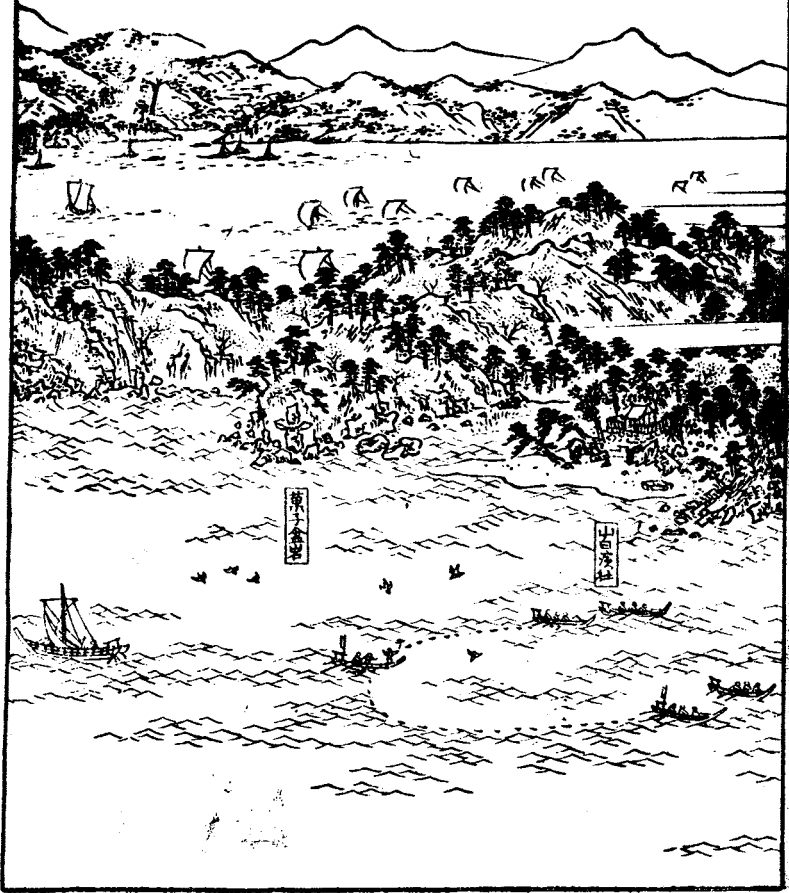
登彌山

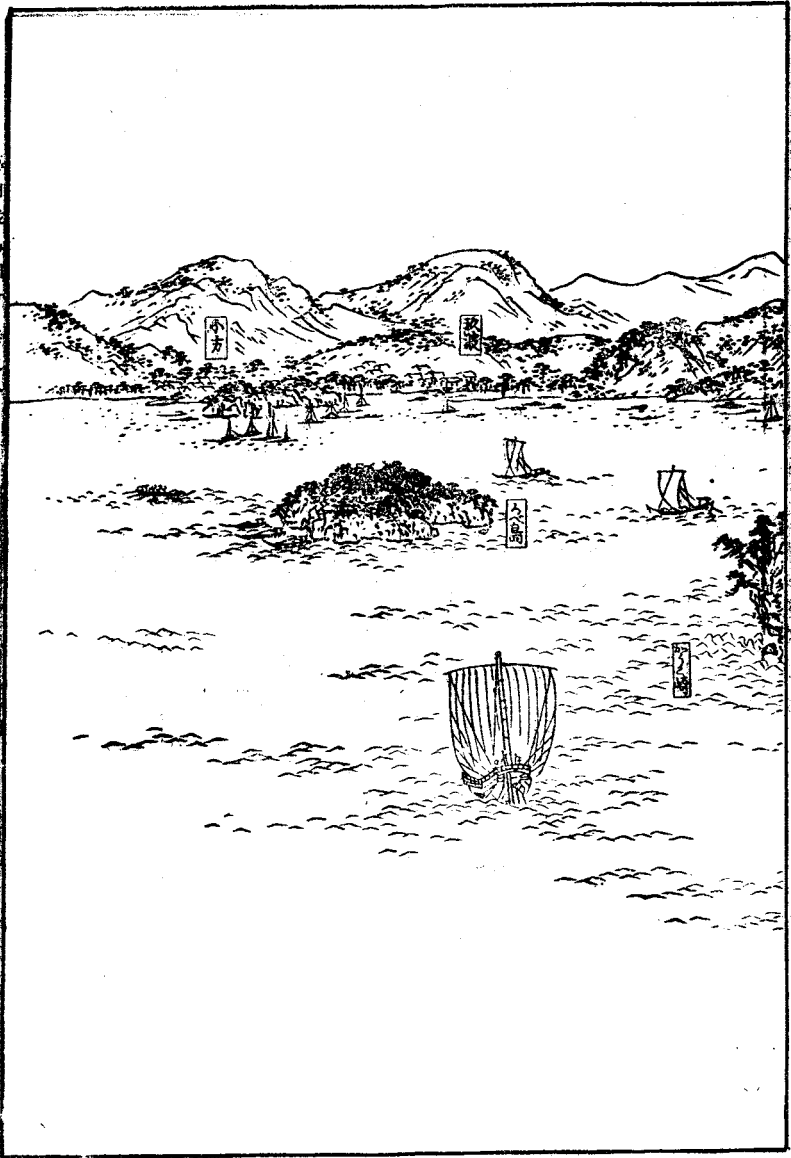
雖愛雲光薄  
尚知嵐氣堪  
穿林親瀑水  
度嶺遇磨巖  
松偃堪為棧  
巖懸自作家  
樵童華表外  
拍手喚神鴉

賴春水



裏四





## 嚴島圖會卷之一

嚴島は安藝の國西海中にあり。府城廣島を去ること五里、佐伯郡に屬せり。島周圍七里、西北を面とし、東南を背とす。遠くは伊豫、周防の地を望み。ちかくは佐伯郡の地方に對せり。舊島號は恩賀島また御香島、あるは霧島、我島など稱へりといふ説あれど、さだかならず。おもふに、この島もとはさせる名もなかりしに、御神の鑱座し後、その神號の市杵とかよはして、頓て伊都岐島とは號たるならん。類聚國史、延喜式、三代實錄、山槐記、拾芥抄等の諸書、みな伊都岐島とあり。後世専ら嚴島と稱へたり。是もまたその音のかよへるゆゑなり。「割註」宗祇名所方角抄には、明神この島の山なみ、磯のさまいつくしと仰ありけるにより、いつくしまと號せりとぞ、云々と見えたり。」また宮島といへるも、其唱既に久しくして、高倉帝御幸記及び殊域の書、登壇必究、圖書編等にもみな宮島とかけり。島のうちに七浦八景の稱ありて、日本三名區の其一なり。按ふに、上件にいへる恩賀島また御香島、我島、霧島などの説、更に正史に見る處なし。但道芝記に二首の歌を引て

入海の八十浦かけて十島なる中に香ふかき島は七浦

恩賀しまのすがたはおのづからよもぎがしまもこゝにありけり

云々。第一首を小野篁の歌とし、二を在原業平とす。この二歌によりて、おんがの島といふよしを記せり。されど香深き島とあるを以て御香の島といひ、恩賀の字をたぐひなきと訓するなど其義知がたし。また我島の説は神歌とて、傳ふる歌に、

わたつみのおき所こそうきたれどこはわが島ぞこれはながしま  
云々の義に據れるなり。然るにこの歌、安藝國名所として歌枕名寄に出て、我島、汝島の二島は、佐  
伯郡能美島海上にありといふ。是もこの島にあらざるべし。さては神詠とせんも、中々に杜撰といふ  
べし。霧島といへるも何の證もなし。

懷中抄 あだならん人には見せじいつくしま波のぬれ衣きせん物かは

本社〔割註〕安藝國第一宮 嚴島大明神。

○延喜神名式曰、安藝國佐伯郡伊都岐島神社（名神大）

○諸社根源抄曰、安藝國佐伯郡伊都岐島社名神大、市杵島姫、田心姫、湍津姫、以上三座。

○大日本一宮記曰、安藝國佐伯郡伊都岐島神社。

○正殿三座 市杵島姫命 田心姫命 湍津姫命。

○合殿三座 國常立尊 天照皇太神 素戔鳴命。

○客神社五座 正哉吾勝々速日 天忍穗耳命 天穗日命 天津彦根命 活津彦根命 熊野權樟日命。

○古事記曰、於是洗左御目時所成神名、天照大御神、次洗右御目時所成神名、月讀

命、次洗御鼻時所成神名、建速須佐之男命、此時伊邪那伎命、大歡喜詔、吾者生々而於

生終得三貴子、即其御頸珠之玉緒母山良邇取、由良邇志而賜天照大御神而詔之、汝

命者所知高天原矣事依而賜也。故其御頸珠名謂御倉板擧之神、次詔月讀命、汝命者所知夜之

食國矣事依也、次詔建速須佐之男命、汝命者所知海原矣事依也、故各隨依賜之命所知



劔王御誓 けんおうごちか



田中 芳祐

久うみれまたを弁

乃ろのをとたろ

半海とつる丸の

たろろ

まろろの



櫻兒  
持太家藤可為筆

画院  
坐徒

二神安河のなれ  
を隔てむひ文勢  
にまふとかな文の  
一松さびその苗を  
かびくそち香杖  
のまからハこの持香  
天上のてのみたさよ  
一を児音小頼く知  
一先令とてなり

看之中、速須佐之男命不知所命之國而、八拳須至于心前、啼伊佐知伎也其泣狀者、青山、如栢山、泣枯、河海者悉泣乾、是以惡神之音如狹蠅、皆滿萬物之妖、悉發、故伊邪那伎大御神詔速須佐之男命、何由以汝不治所事依之國而哭伊佐知流爾、答曰、僕者欲罷妣國根之堅洲國故哭爾、伊邪那伎大御神大忿怒詔、然者汝不可住此國乃、神夜良比爾夜良比賜也。

(中略)故於是速須佐之男命言、然者請天照大御神將罷、乃參上天時山川悉動、國

土皆震爾、天照大御神聞驚而、詔我那勢命之上來由者、必不善心、欲奪我國耳、即解御髮、纏御美豆羅而乃於左右御美豆羅、亦於御髮亦於左右御手、各纏持八尺勾璣之五百津

之美須麻流之珠而、曾毘良邇者負千入之鞆、附五百入之鞆、亦所取佩伊都之竹鞆而、弓腹振立而、堅庭者向股蹈那豆美、如沫霽散而、伊都之男建踏建而待問、何故上來爾、速須佐之男命

答曰、僕者無邪心、唯大御神之命以問賜僕之哭伊知流之事故白都良久、僕者往妣國以哭爾、大御神詔汝者不可在此國而、神夜良比夜良比賜故、以為請將罷往之狀參上耳無異

心爾、天照大御神、詔然者汝心之清明、何以知於是速須佐之男命答曰、各宇氣比而生子故爾、各中置天安河而宇氣布時、天照大御神先乞度建速須佐之男命所佩十津加劍、

打折三段而奴、那登母々中良爾振濰天之眞名井而、佐賀美爾迦美而吹棄氣吹之狹霧所成、神御名、多理毘賣命、亦御名謂與津島比賣命、次市杵島比賣命、亦御名謂狹依毘賣命、次多岐都比賣命、速

佐之男命、乞度天照大御神所纏左御美豆良八尺勾璣之五百津之美須麻流珠而、奴那登毛母由良爾振濰天之眞名井而、佐賀美爾迦美而吹棄氣吹之狹霧所成、神御名正勝吾勝々速日天之忍穗耳命、

亦乞度所纏右御美豆良之珠而、佐賀美邇迦美而於吹棄氣吹之狹霧所成神御名天之普卑能命、亦乞度所纏御鬘之珠而、佐賀美邇迦美而於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、天津日子根命、又乞度所纏左御手之珠而、佐賀美邇迦美而於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、活津日子根命、亦乞度所纏左御手之珠而、佐賀美邇迦美而於吹棄氣吹之狹霧所成神御名熊野久須毘命、拜五柱。

日本書紀には、以二日神所生三女神者、使降三居葦原中國之宇佐島一矣。今在二海北道中一號曰二道主貴、此筑紫水沼君等祭神是也云々。また舊事紀には、三女神降三居筑紫國宇佐島一在二海北道中一とあり。これ筑紫の宇佐島に御鎮座のことを記せるなり。さるを在二海北道中一といへるをもて、この島のことにあつるは謬なり。

○神階 三代實錄曰、貞觀元年己卯春正月二十七日奉授安藝國正五位下伊都岐島神從四位下。

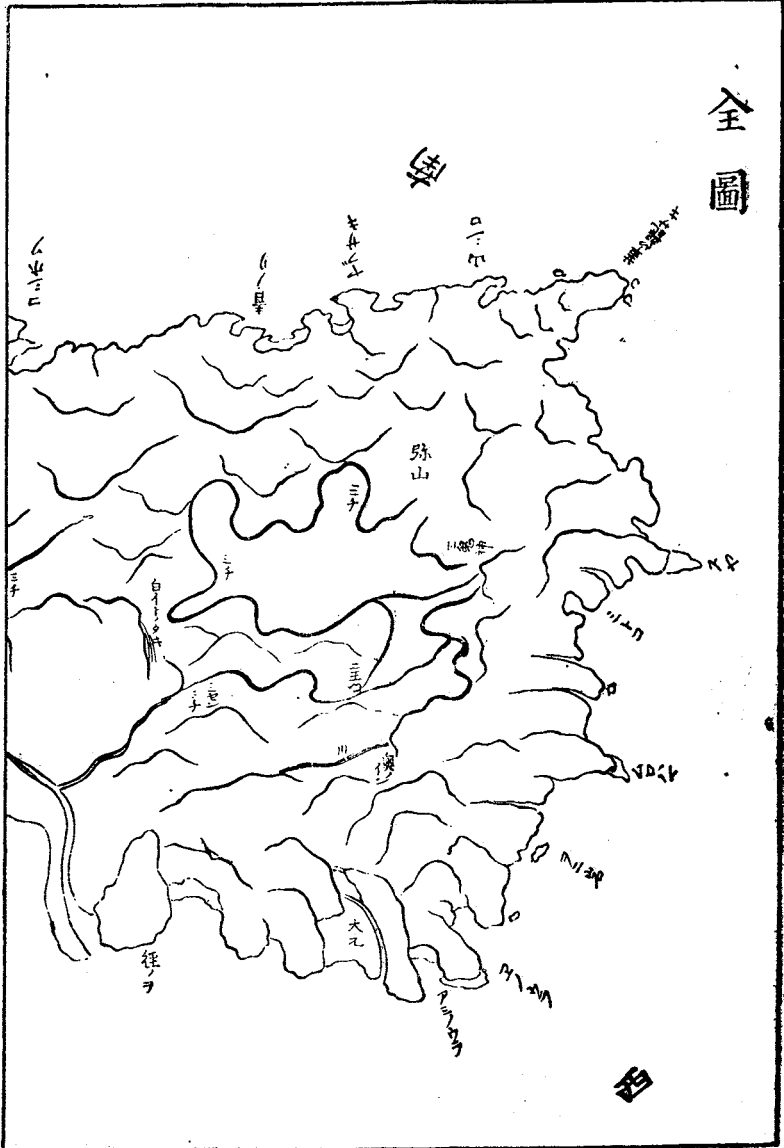
同九年丁亥冬十月十三日戊寅勅授安藝國從四位下伊都岐島神從四位上。云々。のちつひに正

一位にすゝみたまへり。そもく神に位階を奉らるゝことは、もと尊卑をわかつたためにあらず。令義解、閑田耕筆等に神位の高下をもて、神領の多寡を定めらるゝこと見え。また北畠准後の造殿儀式には、神の品位をもて封域を定むることありて、正三位以上四至九町、從四位以上四至八町、從五位以上四至限二四町と見えたり。三代實錄には、仁壽元年正月庚子、詔天下諸神不レ論ニ有位無位。叙ニ正六位上。とも見ゆ。

○神領 按に、聖德太子傳に推古帝の綸旨を載せらる。當社神領は當國中水田一千百八十町、修理八千餘町とあり。是明神廟祭の時の寄附と見ゆれど、外に證なし。神庫に藏めたる古文書に、仁平四

全圖

燕州嚴島圖會卷之一



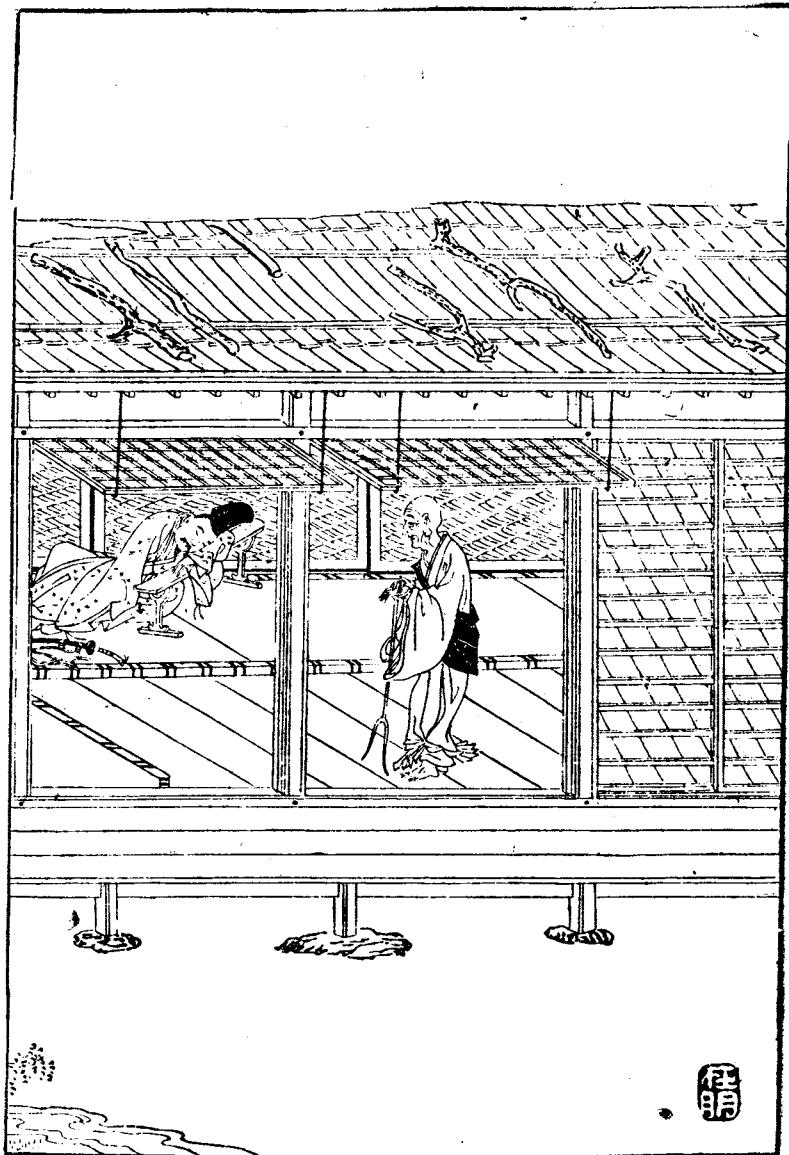


年に院廳并に國司廳宣を以て、當國高田郡三田一郷を神領に定めらる。また仁安元年の立券書には、一宮御領志道原合一町六反二百四十歩とあり。また嘉應三年の文書に、公家方并に建春門院御祈禱料、伊都岐島御領王佐庄、田七十六町、畠十一町とあり。また安元元年春、木市折二村御供田、同二年高田郷七箇郷を附せられ。治承四年に寄盛より安麻庄を寄進あり。正治元年にも朔幣殿中御供田、新御供田など定めらる。文曆年間周防前司親實當國の守護となり、神職をかね神領を支配す。また東鑑に、承久四年四月十八日、安藝國千與末地頭令寄進嚴島神領。云々。正應六年蒙古來寇のとき、降伏の祈禱ありて、鎌倉より因幡國船岡郷半分寄進あり。のちに足利尊氏、大内義隆よりもしばしば寄附あり。また房總記には、小方久波、黒河、大野、山郷の四郷を大内義隆より寄附のこと見えたり。其後毛利家の時は五千石なりしが、福島正則入封のとき諸寺諸社の領園を削りしゆゑ、當社領も大に減少せり。

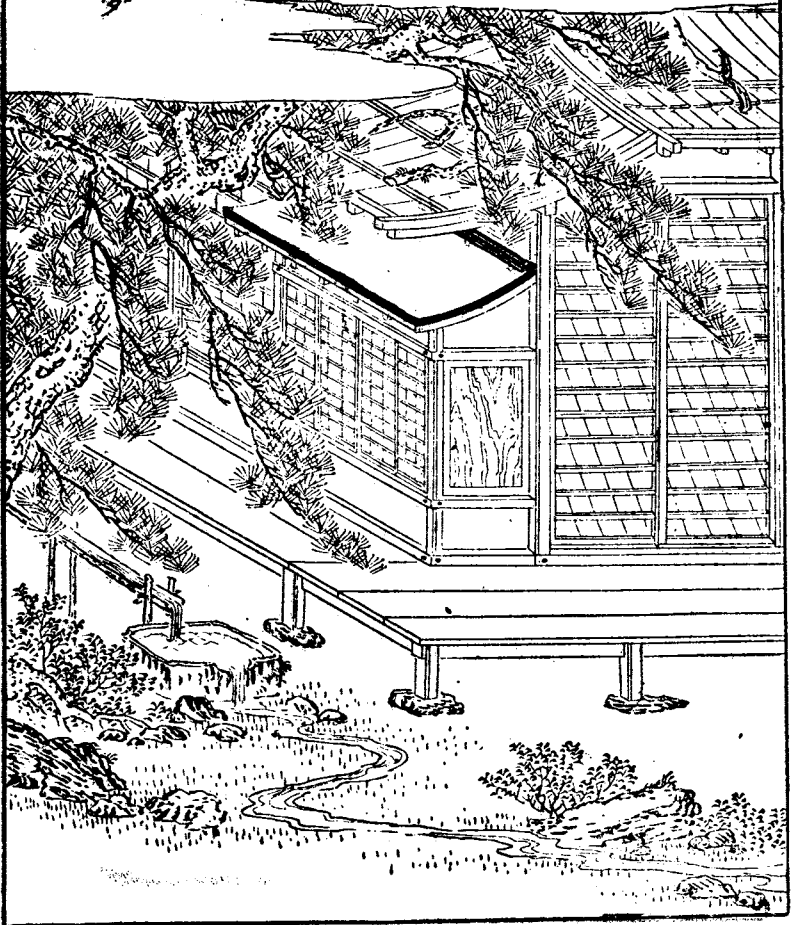
伊都岐島の大御神と稱し奉るは、掛卷も恐し市杵島姫命、湍津姫命、田心姫命以上三女の神にましまして、共に天照大御神の生ませるところなり。伊邪那岐命、伊邪那美命、天下の君たるべきものをうまんとて、生しませる御子を天照大御神と申し奉る。次に月讀命は、青海原を所知めず故各依したまへるまにまに、所知すが中に、須佐之男命は其性勇悍くして、青山を村山となし、人民を書ひたまひしかば、伊邪那岐命いたく忿怒して、極めて遠き國に神逐にやらひたまへり。是によりて須佐之男命、根國に至りたまはんとせしに、まづ天照大御神に其山を告て後にこそ罷りなめとて、高天原に參上りたまひ

しかば、海山鳴動あへり。天照大御神これを聞召して大に驚かしたまひ、是かならず須佐之男命のあしき心より起れるなるべしとて、御身に勇夫の猛き備を設け、嚴男建踏建て待たまへれば、須佐之男命これを見まして、僕はさる異心なし、此度父命に逐れしによりて、告白て後まからんため參來つるにこそあれとのたまひければ、天照大御神聞召、さもあらば其清き心を何としてかはあかしたまはんと詔ひき。於是須佐之男命のたまふは、我阿姉とよもに誓をたて、御子生み侍らんとのたまひて各天安河を隔て誓ひたまふ時に、先天照大御神、須佐之男命の佩したまへる十握の劍を乞度り、うち折て三銃になし、天の眞名井に振濺ぎ齟然にかみて吹棄る。狭霧の中に生しませる御子、田心姫命、市杵島姫命、湍津姫命にます。既にして須佐之男命、天照大御神のもちたまへる八坂瓊の五百箇御統る玉をこひとり、天の眞名井にふりそゞぎ、さがみにかみて吹棄る、さぎりの中になしませる御子、正哉吾勝々速日天忍穗耳命、天穗日命、天津日子根命、活津彦根命、熊野櫛樟日命、以上五男の神にてましくけり。かゝるに當島御鎮座のこと正史に載せしことなく、鏡かに社家の傳ふる所は、昔三神此地に天降まし、此島を御在所に定むべきよし、當郡の住人佐伯鞍職と云者に御説言なし給へり。鞍職かしこくも官奏を経ければ、御寶殿を造立し、神領許多を附たまひけり。これ推古天皇端正五年癸丑十一月十二日なりといふ。(割註)按ふに、端正の年號帝紀に載せざる所にしておぼつかなし、或は崇峻帝の朝、端正の年號ありて五年にして終る。すなはち崇峻帝即位二年は端正元年に當れりといへり。かゝれば端正五年は、推古帝即位元年とすべきにや、蓋し聖德太子傳にも、推古天皇即位元年十一月十二日、明神はじめて現じたまふよしを載せり。此説據あるに似たり。また下部





清盛靈夢  
の番



兼右の遷宮記には、端正三十二年甲申鎮座したまへりといへり。房顯記（當社天文のころの祠宮房顯の作なり）には、端正は年號にあらず、天子即位をいふといへり。されど大化前後正史に載せざる年號、かれこれの書にみえ、法興（推古四年を元年とす）の年號は、伊豫國の湯碑に見え、法興二世（推古二十九年も元年とす）法隆寺釋迦佛光後銘に見えたり。かくのごとく千載のまゝを傳ふる金石にも見ゆれば、古代年號ありしこと、また強ふべきにあらず。」其後烏兔五百餘年を経て社頭の荒廢甚だしかりしに、平相國清盛、はじめ當國の守護たりしとき、不思議に夢中の告ありて社頭を再建したまへり。其頃は人皇七十四代、鳥羽天皇の御代しろしめす時なりき。清盛高野の大塔を修造せられけるに、七十有餘の老僧の、肩に八字の霜を垂れ、面に滄海の波を疊んで、かせ杖の二股なる先に鐵の入たるをついて清盛に申されけるは、此大塔の造營こそ、かへすく神妙なれ。爰にまたひとつの願あり。抑安藝の嚴島と越前の氣比とは、西海、北陸境異なれども、金剛、胎藏兩界として目出度處にて侍るなり。氣比社は、繁昌すといへども、嚴島は荒廢せり。汝須く早く修理を加へ崇敬を盡さば、我身の榮花子孫の繁昌たるべしと申したまへり。こはいかなる人にて座すらむ、あれ見て參れとて人してその跡を見せたまふに、三町ばかり隔りて彼老僧は御堂の中に入るよと見えしは、一場の春夢にぞありける。清盛奇特の思ひをなし、下山の後院參して右の夢想を奏聞し、任を延て當國に下り、新に殿宇を改め作り、百八間の廻廊を起し、鳥居を建て攝社末社に至るまで壯觀舊にまされり。修理功終りて清盛大宮に參籠せられけるに、天童忽然として現じ來り、我は是大明神の御使なり、此劍を以て朝家の御固をすべしとて、銀の蛭巻したる小長刀を賜ると見て覺しに、實にぞ頭邊に劍ありける。

但し惡行あらば子孫まではかなふまじとぞ御託宜ありける。「割註」盛衰記平家物語取意。「かゝりしより一門の覺えいとたふとく、つひに清盛朝廷の外戚として太政大臣從一位に歴上り、威を一世に振ひたまひしも、偏に當社の御はからひとぞおもはれける。されば、むかしも今も示現即託の利生新にして、上は天子の行幸を初め奉り、代々將軍家の崇敬おろかならず。およそ西討東征北伐南誅、或は自ら癩癩の禮を取り、或は代幣を以てかならず先當社において軍陣の首途を祈らざるはなし。就中文永、正應の頃異賊來寇せしに、また降伏の御祈あり。この故に社頭の結構は日を逐ひて美麗に、四時の祭禮は歳々に嚴かなり。百八の神燈長に日月と光を争ひ、參詣來拜の輩は雲霞とゞもに去來を絶す。殊にこの御神は、海路の安全を守護たまふなれば、澳漕ぐ船も奠を設て過ぎ、漁る泉郎もまづ初穂をぞそなへける。誠に海西の大神にして當國の一宮を仰ぐもまた宜ならずや。御社は島の北面にありて、山に背き海に向ひ、廣斥に宮居したまひ。その景たるや、日域に名だゝる勝地にして、先哲既に龍都仙宮に比せるもまた其當を失なはずといふべし。廻屈せる廊々輪奐たる宮殿、潮水の上に浮んで恰も唇樓の波に漂ふごとく、彌山の嶺高く聳へ、松嵐直に吹落て蒼翠の色瑞籬に映帶す。彌猴子を負ひて市頭に戯ぶれ、麋鹿群を率ゐて沙上に臥す。遙かに眺望を極むれば、蒼波渺々として、遠帆は動かすと詠ぜしおもむきあり。且この島は、櫻多くして百千鳥囀る。春のころは峯々谷々社頭浦々に至るまでさくらにあらざる所なく、さながら雲散雪飛一樣ならずして、騷人墨客の心を蕩かす。中秋の月は彌山の上より出て、銀色三千界ともながむべし。また雪のあした殊更にして、たえぬ眺望は、およそ三景の冠たるべし。

本社  
客人社

前権中納言持世

うなみや

まぢも

たらしひ

なみのうら

こぢり屋

一筋とん

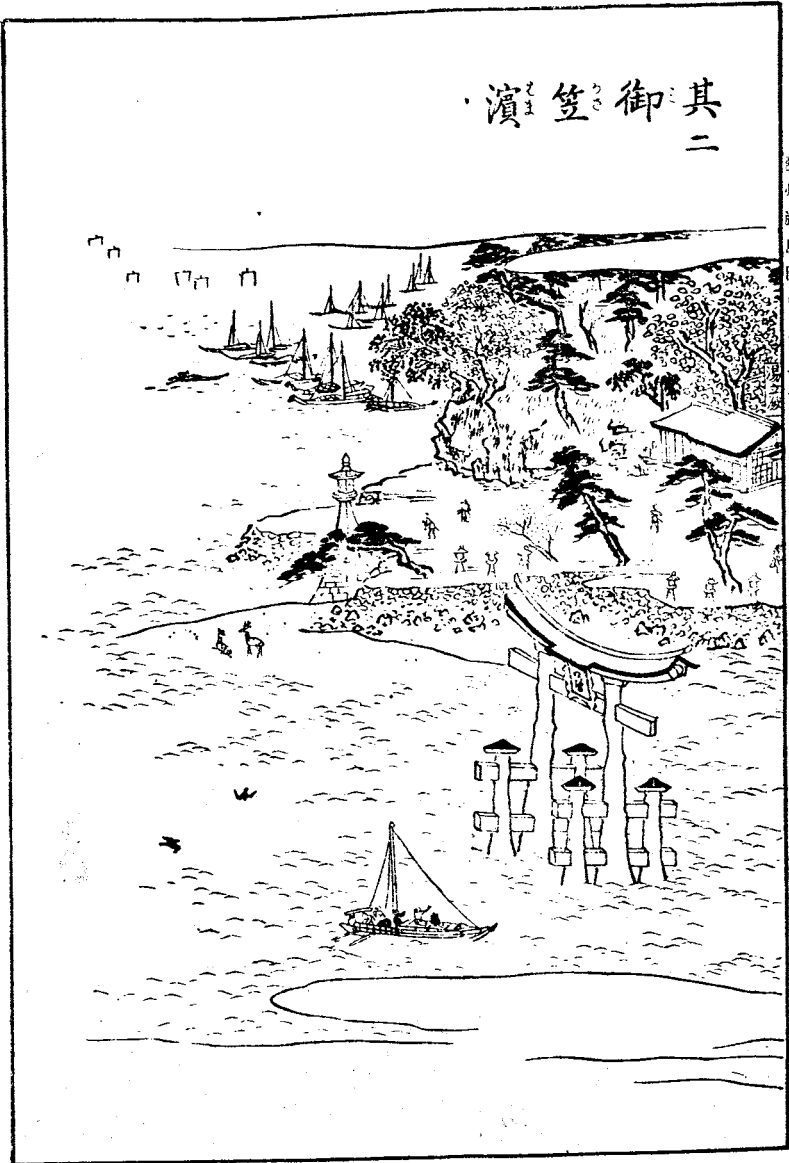
うつく

きんぎょ





其二 御笠濱



本藩加藤氏所藏官摹貝の圖

貝大さ齒のごとく一ひまりの如き白た  
らひまで表ハ鳥居の紋あり文化乙  
丑のと一大多居の洲ふて拾ひ得  
ものとす

所々ちみの一とゆふ

可ハるも一とゆふ

林の三やう一貝

山田貴三



法橋有景寫





○西行撰集抄曰、あきのくにいつくしまの社は、うしろは山深くしげり。まへは海、左は野、右は松原なり。東の野に清きながれあり、これを御手洗といふ。御社三所おはします。またすこし前の方に引退て南北へ三十三間、東西は二十五間の廻廊侍る。潮の満つときは、廻廊の板敷の下まで海になる。汐のひく時は、白汐五十町ばかりなり。然はあれども汐のさしたる時まるれば、ふねにて廻廊の中までまゐるなり。氣高くいみじき事たとへもなく侍る。但いかなる御事やらん、御簾のうへには御正體の鏡をかけまゐらせで、御簾の下にかけまゐらすなり。かの御神は女體の神にておはしますなれば、かくはならはせるやらん、おほかたは御社は山上にあがり、廻廊は平地にあり、東西南の三方晴わたり、ことに心もすみ侍るところに、鹿を狩されば御山には小鹿なき、草に露おち虫のこゑさかりに侍りし。なに心なき人も、この御社にては心のすむなるところそ申傳へて侍る。(割註)按ふに、撰集抄にいふところ、よくこの地の景勝にかなへり。但し其頃は本社の左右に松林原野ありしとみゆ。今は市街つらなり多く堂社を置けり。いま御靈川の裔にながき松原あるは、後に築るものなり。御靈川は、抄に東の野に清き流ありといへる、これなるべし。」

○大宮寶殿 (割註)明神鎮座の正殿をいふ。桁十二間、梁五間五尺餘。」○幣殿 (割註)正殿の前にあり。桁三間二尺、梁二間五尺。」○三棟拜殿 (割註)幣殿の前にあり。桁十五間一尺、梁六間半。」

○祓殿 (割註)同殿の前にあり。俗これを組入と稱す。桁八間一尺餘、梁五間半。」

○高舞臺 (割註)伶人舞樂を奏する處なり。祓殿のまへにありて神殿にむかふ、左右に唐銅の獅子、石燈籠あり。」○平舞臺 (割註)高舞臺を挟みて左右にあり。臺下の石柱三百十二本、高五尺五寸、圍

八寸ことくく赤間關の石をもちふ。」○樂房二宇〔割註〕左右に分れて平舞臺に連なれり。」  
○門客神社二宇〔割註〕樂屋とならびて左右に分れり。俗に沖惠美須と稱す。」

祭神 豐磐間戸命、櫛磐間戸命

○廊 嘯〔割註〕門客神社二宇の間より長く延出して西北にむかふ。正殿よりこの間凡三十六間あり。當社宮殿は中央に神殿をおき、長廊廻屈して蟠龍の如し。この處長くさし出たり、依て俗に是を舌先

とよぶ。唐銅の燈籠一基あり。」

○大黒堂〔割註〕大宮の左にあり。」祭神 大國主命。

○天滿宮〔割註〕同殿の傍にあり、毎月連歌の會あり。故に連歌堂といふ、古人の名句おほし。」

○客神社寶殿〔割註〕大宮の右三十間にあり、西南にむかふ、桁七間餘、梁四間五尺。」

○幣殿〔割註〕客神社の前にあり、桁二間四尺、梁二間一尺。」○三棟拜殿〔割註〕同所にあり、桁

十二間餘、梁四間四尺。」○祓殿〔割註〕おなじく拜殿の前にあり、桁五間、梁四間四尺。」

○廻廊〔割註〕およそ百八間ありて間毎に燈籠一箇を釣る、すべて廊の板敷釘を用ひざる故に行歩に

随つて鳴る。」○圓橋〔割註〕大宮の左にあり御池に架せり、幅二間、長十四間俗に反橋と呼ぶ。」

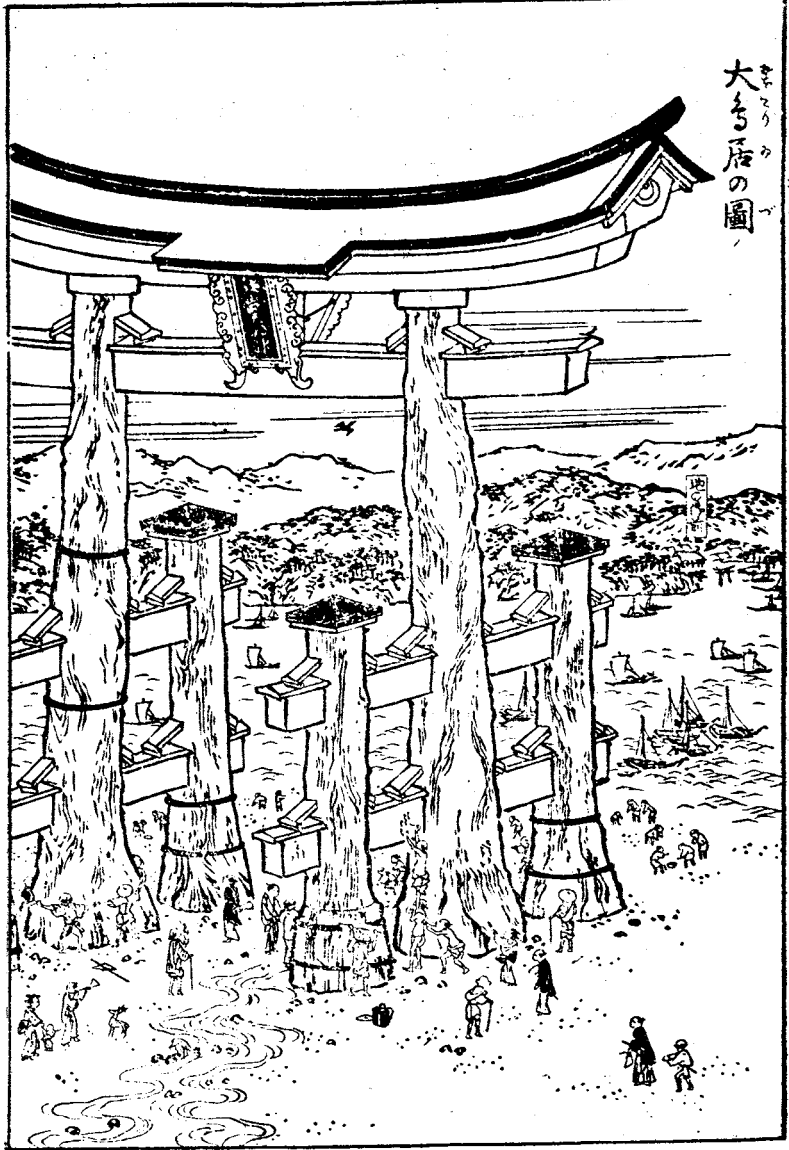
○平橋〔割註〕大宮と客神社の間にあり。」○瑞籬〔割註〕大宮客神兩宮の外垣なり、長おのく

百間あり、このうちを玉の御池といふ。」○御供所〔割註〕本社之東にあり ○湯立殿〔割註〕客神

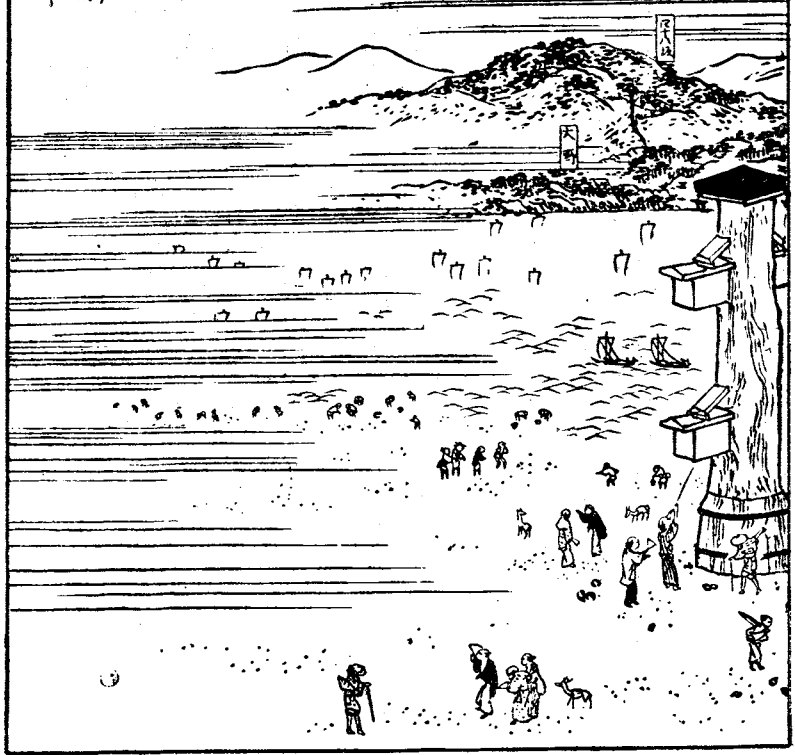
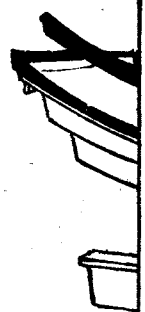
社の北にあり。」○能舞臺〔割註〕大宮の西南にあり、斜に神殿に對す。三月十六日より三日の間法

樂神能あり。」○鐘樓〔割註〕本社之右にあり、鐘は大内義隆の寄附なり、銘別にあげたり。」

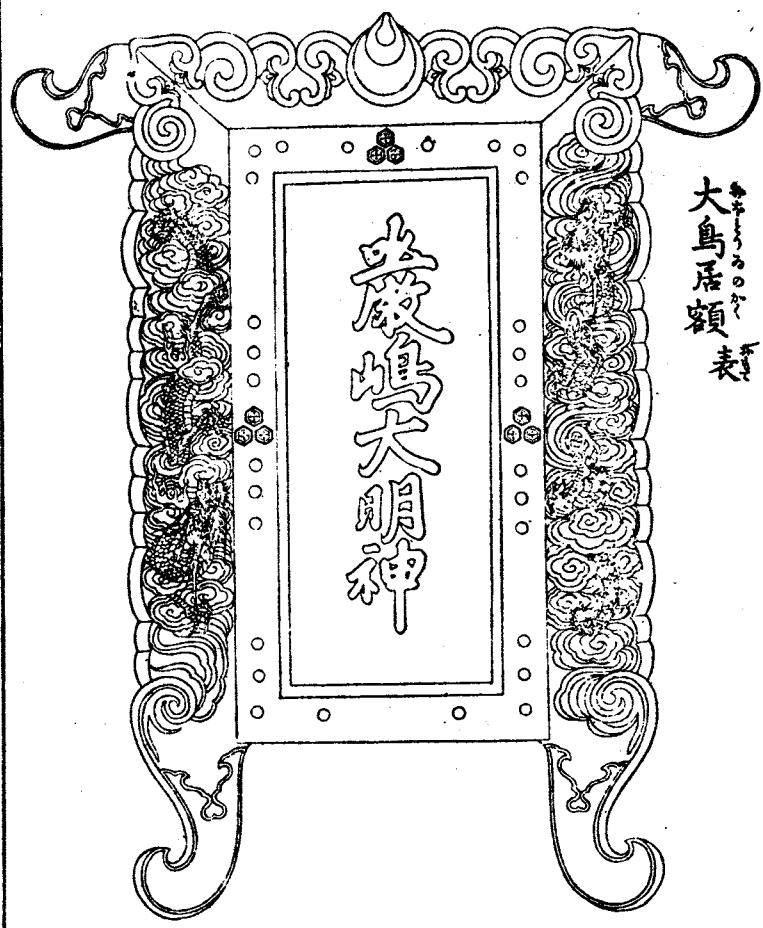
大木居の圖

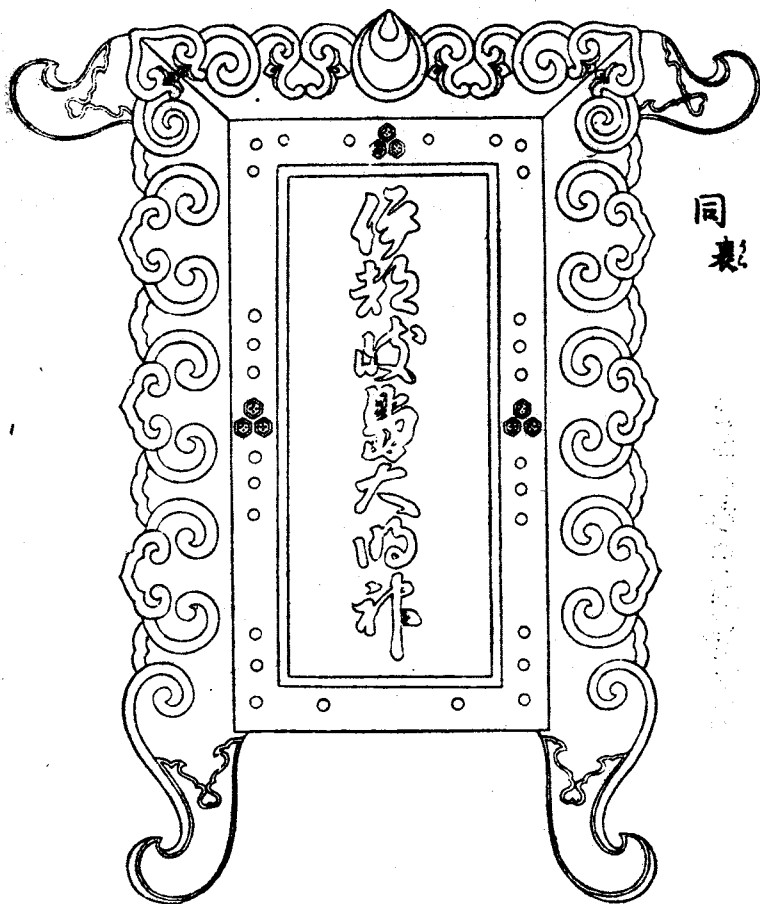


唯ふやうに、重なるに、  
 青居の玉膳、五陸奥の  
 本城野とて、けは秋、たはら  
 二大、あまう、はうなる、多う、ま  
 月圓の津經の弘前の二里、  
 かり、こなり、に大、舞、と、取、ま、大  
 日堂の、り、前、なる、林、の中、  
 一本、此、大、本、の、十、餘、大、り、  
 の、高、さ、の、か、と、み、に、圍、は、り、  
 な、も、り、と、と、見、ま、し、業、も、花  
 も、今、ら、花、な、く、も、と、藤、  
 の、園、も、花、の、大、き、本、あ、り、  
 とい、う、と、あ、ら、も、の、か、記、一、た、  
 り、と、ゆ、な、女、み、ひ、く、と、と、あ、  
 草、庵、集、の、は、か、こ、田、社、乃、も、屋、の、  
 柱、ハ、秋、の、本、か、て、つ、ら、と、い、つ、も、浮、  
 なる、こ、と、ま、い、り、し、と、む、も、い、つ、も、の、松、構、  
 の、高、大、なる、と、ハ、女、文、つ、な、て、一、つ、を、



大鳥居額表





同製

多居額二多際 震

三為子歲八音一

二定二二威

後是

古彩

空社文長之世評

大内王正法之神

十一月廿七日

函

廣弘明社大形寺



○寶藏 「割註」大宮の南にあり、庫中に納むる處の寶物は別に梓にちりばめて後編とせり。」

○文庫 「割註」大宮の北にあり、二十一史十三經をはじめとして和漢の書籍數百部を納む。中央に聖

籤をおけり、額は文徵明の筆蹟を集字にして名山藏の三字を刻す。また聯には東壁圖書府西園翰墨

林の句あり。北島雪山が筆なり。」

○大鳥居 「割註」舌先を去ること七十間餘、海上にたつ。柱高さ四丈四尺三寸、圍一丈五尺、副柱高さ二

丈八尺、圍り一丈一尺五寸、棟長さ六丈四尺四寸、梁五丈九尺六寸、左右柱相去ること五間餘、結構

高大にして甚壯觀なり。」

およそこの鳥居を改作ること數度。まづ平家物語に、清盛鳥居まで改作るとあり。その後寛元

仁治の間本社修造のとき改め造り、また弘安九年、應永四年、天文十六年、元文四年、享和元年を

以てす。かく數度の經營みな北條、足利、大内、毛利、尋では本藩の御寄附なり。按ふに、草庵集

萩のうたの法に、藝州いつくしまの鳥居の柱は五抱あり、一本は林の木にて作るとみゆ、いつの頃

なりけん島にはその傳なし。

○同 額 「割註」竪八尺三寸、横四尺二寸、圖につきて見るべし。」

今の額は、後奈良天皇の宸筆にして、大内義隆の奏請して奉納せし所なり。傳へいふ、昔の額表は小

野道風、裏は空海の筆なりと。按ふに、玉海に高倉天皇の承安五年七月十三日、右衛門督宗盛以

信基朝臣一示ニ送額輔朝臣ニ云。伊津岐島額可ニ申請。雖レ有レ恐本額前大僧正被レ書之。今

亦立ニ鳥居。仍可レ打レ額。申下他人有レ憚由也。可レ然之様相謀可レ合レ申とあり。また安元三年六月

十八日、今日召三尹明、送伊都岐島額於右將軍之許。來月入道相國相共可ニ參詣。彼社押件額宇都津兩字未レ決。仍尋ニ官文殿式正レ之之處。爲三都宇之山降職已。注中。仍用件字。とあるによれば、かの道風の書といへるは、承安、安元より前つかたのことなるべし。

○繪馬 上諸侯より下庶民に至るまで、萬國より獻じ奉る所にして其繁多なる凡天下に冠たり。まづ本社の組入のうちより初て客神の宮三棟、拜殿東西廻廊の間透間もなくかけならべ、其大なるは

凡堅九尺、横一丈二三尺に至るものありて、みな名畫の巧みを盡せり。就中古法眼元信の牛若、常信の七福神、狩野左近が馬、尚信の羅城門、土佐某が三十六歌仙、うたは山崎宗鑑の筆なり。おなじく歌仙繪は土佐家、書は昭高院道澄親王、是等世のよく知るところなり。その餘石川左近をはじめ近世諸名流の墨跡、もとより枚擧するにいとまあらず。

○社頭修理 推古天皇の御代佐伯鞍職官奏を経て、始て宮殿を創建すといひ傳ふ。これ當社造營の始なるべし。其後清盛攝社、末社、廻廊、鳥居に至るまで悉く修造せしこと平家物語に見えたり。但し其間修造のことあるべけれど、典故の徴すべきなければ考るところなし。そのうち仁安元年、祠官佐伯景弘が修御奏狀に、神殿并に舍屋私力を以て改作るよし見えたり。建永二年に殿宇回祿せしかば、官使を下し地を検し造營を命ぜらる。建保三年になれり。貞應年中また回祿す。四ヶ年の後、安貞元年に平宰相經隆當國の司として下向、造營のことあり。天福年中祠官親實、大工、少工、鍛冶、檜皮師、瓦師などの諸工を鎌倉より召よせ、造營のことを勤しむ。つひに嘉禎元年勅して當國を社家に附せられ、八年が間の貢をもて兩宮を修造し奉る。仁治二年大牛調ひしが、いまだ全

繪馬を觀る番  
ま  
ま  
を  
観  
る  
番





備せざるを以て寛元元年廳宣を下し、また井原の地を神領に寄せられ、造營の料を助くべき旨命ぜらる。其後ほどへて弘治元年毛利氏、陶全姜と合戦の刻神殿すでに焼べかりしを、吉川元春の力により災を免れしこと、陰徳太平記に見えたり。されど神前を清めんがため、同二年毛利家より廻廊板を改作らる。永祿年中和智豊郷、同湯谷久豊兄弟を神殿において誅せらる。此穢によりて毛利家より改造せらる。元龜三年に成就せしかば。神祇官吉田兼右下向ありて、遷宮の式いと嚴重なりし。

○攝社末社

大元神社

道祖神社(二所)

荒神社(二字)

青海苔浦神社

包浦神社

(以上島内所々にあり)

地御前社

大瀧大明神

(以上島外所々にあり)

○社家供僧内侍社役人職名

瀧宮明神

湯殿山神社

杉浦神社

山白濱神社

養父崎神社

速田大明神社

惣社

白山神社

今伊勢神社

鷹巢浦神社

洲屋浦神社

牛王社(四所)

大頭大明神社

角振社

山王社

惠美須社(四所)

腰細浦神社

御床浦神社

熊野神社

天王社

官幣社

棚守職一員

上卿職二員

祝師一員

大行事一員

檢校職一員

横竹職一員

修理行事一員

小行事一員

地御前棚守職一員

客神社棚守職一員

樂方十五員

内侍職三十一員

神樂男六員

仕人七員

神馬別當職一員

御湯立祝者十二員

大工職一員

小工職一員

鑄物師

瓦師

國府上卿屬官九員

座主

修理別當職

社僧十五坊

○百練抄曰 承安四年三月十六日法皇(後白河)建春門院臨幸安藝嚴島四月九日還幸。

云々。「割註」按ふに、此時右大辨藤原俊經、建春門院の御願文を書しこと、盛衰記に見えたり。」

○梁塵秘抄口傳集曰、あきのくにいつくしまへ、建春門院にあひぐしてあることありき。やよひの十六日、京をいでておなじ月廿六日まゐりつけり。寶殿のさま、廻廊ながくつゞきたるに、しほさしてはくわいらうの下まで水たゝへ、いり海のおもてに浪しろくたちてながれたる、むかへの山を見れば、木々みなあをみわたりてみどりなり。やまにたゞめるがんせきの石、水際にしろくしてそばだてたり。白き浪時々ちかくるめでたきことかぎりなし。おもひしよりもおもしろく見ゆ。その國の内侍ふたり、くろ釋迦なりから装束をし、髪をあげて舞をせり。五常樂、狛鉦をまふ。きかくのぼさつの袖ふりけんもかくやありけんとおぼえてめでたかりき。上達部、殿上人、樂人、太政入道そのと

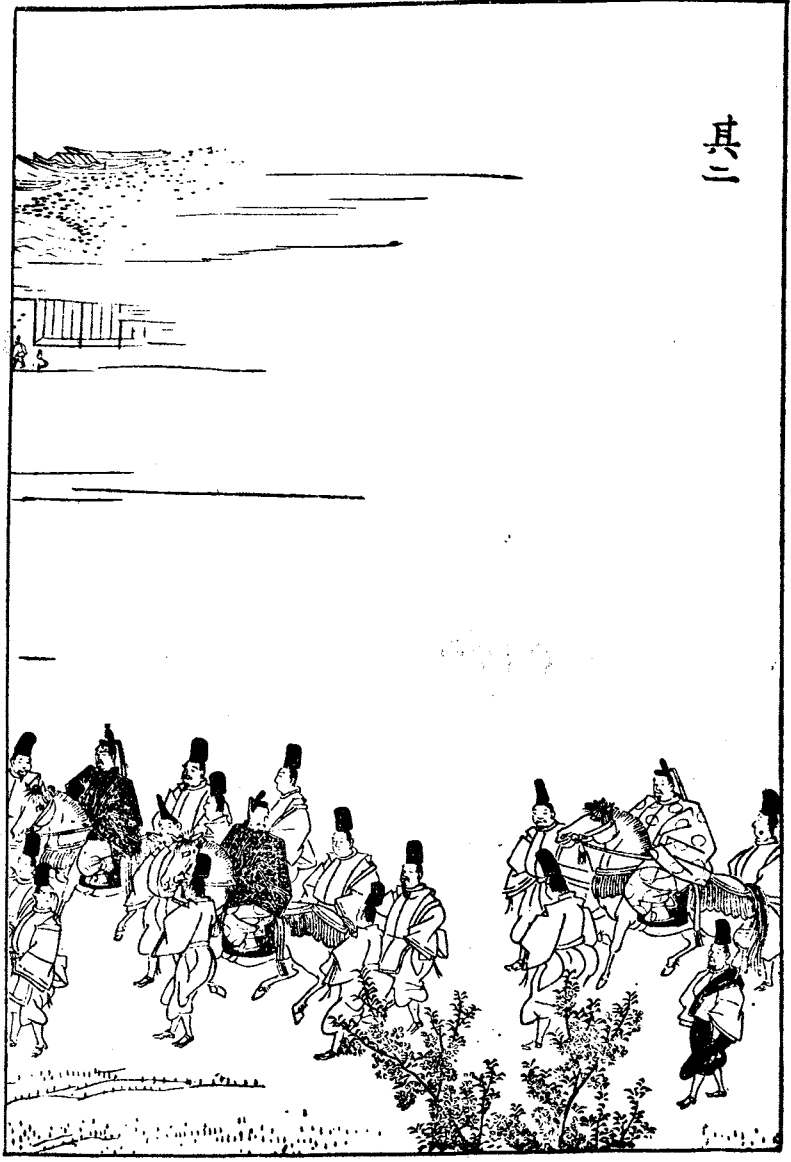
高倉院御幸の番

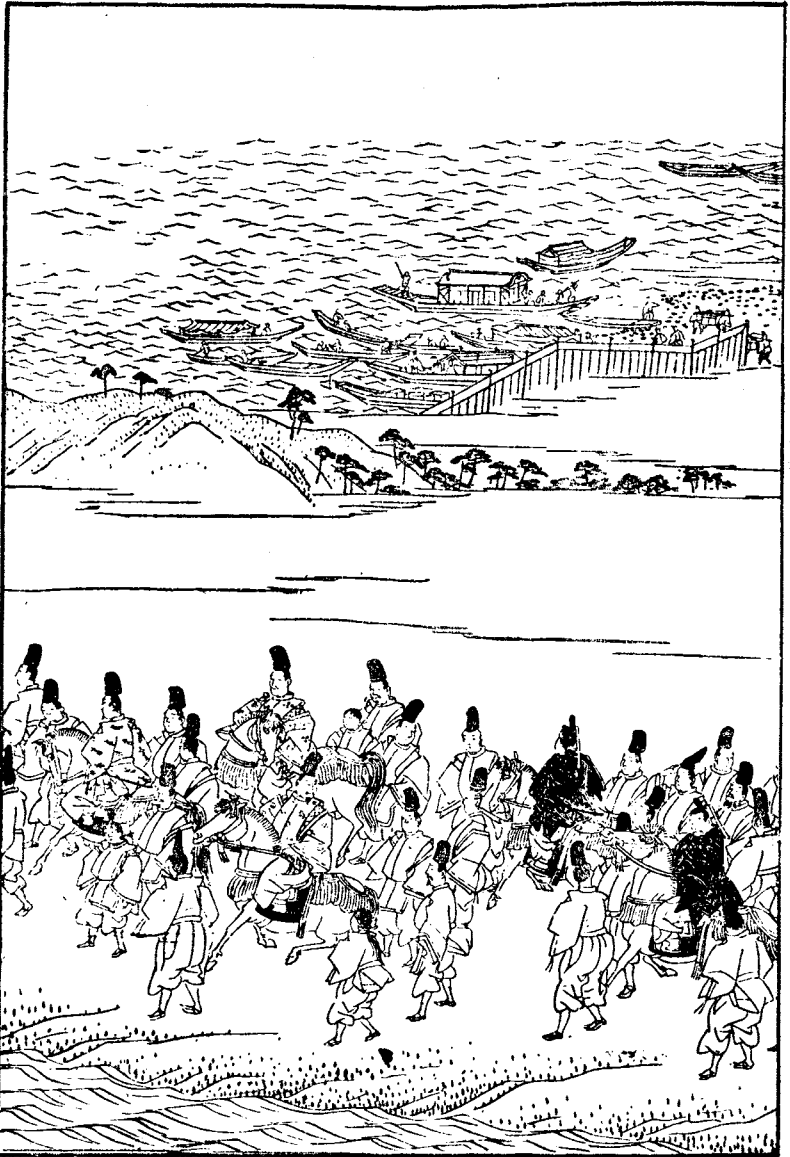






其二





も人、いまだ座をたゝぬほどにまさしきみことて、年よれる女を具して人きたれり。我にむかひて居ぬいふやう、われにまうすことはかなふべし。後世のことを申こそあはれにおぼしめせ、今様をきかばやといふ。あまりはれにして、しかも晝なり、いたすべきやうもなくであるに、なほたびいへば資賢をよびてこれうたへといふ。畏りて居たり。なほきかむといへば、すぢなくていたす。

次第の聲聞、いかばかり、よるこび身よりもあまるらむ、

われらが後世のほとげぞと、たしかに聞つるけふなれば、

といたして、これつけよといへど、資賢あらでつくることなくて二反をはりにき。こゝろに後世のこと他念なくまうす事をいひ出たりしかば、信おこりてなみだおさへがたかりき。太政入道この御神は後世を申をよるこばせたまふよしまうされしかば、さらぬだに現世のこといとまうさぬうへにさありしかば、後世を申をいひひたりしなり。

○百練抄曰、治承四年三月十九日新院(高倉)嚴島御幸。

○山槐記曰、治承四年三月十九日新院令參安藝國伊都岐島二給。四月九日還幸御幸間被レ行勸賞。從四位上平資盛(福原家賞)正五位下平清邦(同)從五位上菅原在經(國司賞安居寺也)神主景弘祝師支之(已上二人一階)御導師前權僧正公顯追可レ請。在經被レ聽ニ新院昇殿。後日相三尋帥大納言隆季ニ被ニ答還。

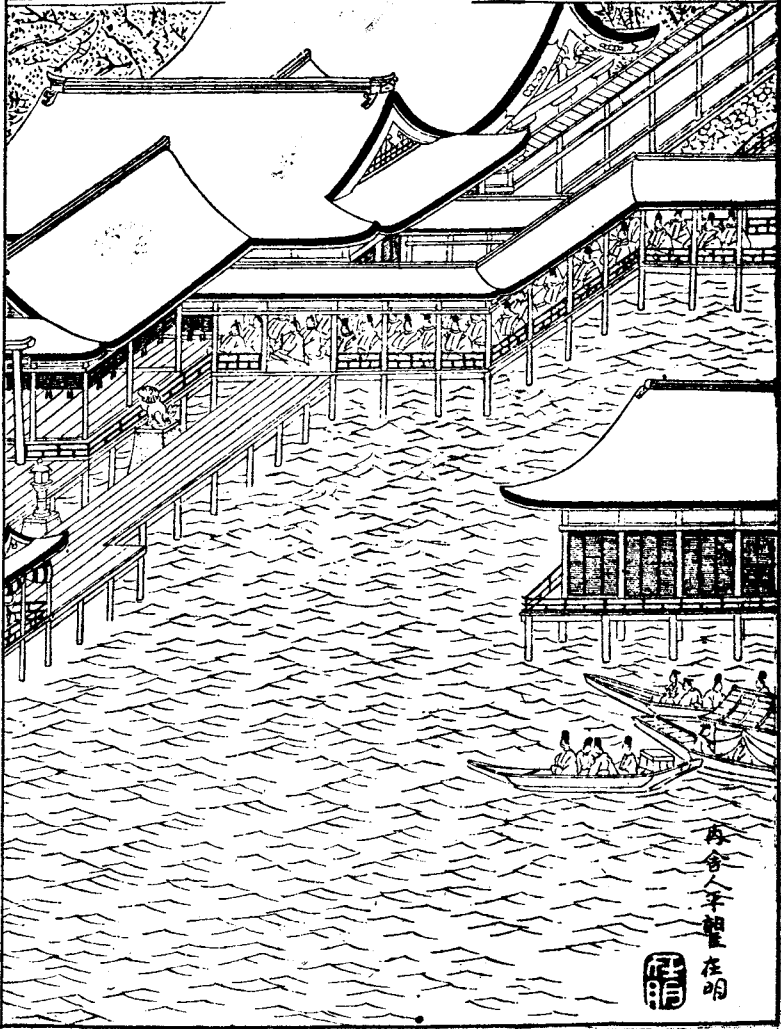
高倉天皇御幸記

土御門内大臣通親公作

治承四年いつくしまへ御幸あるべしとて、公卿には帥大納言隆季、藤大納言實國、五條大納言邦

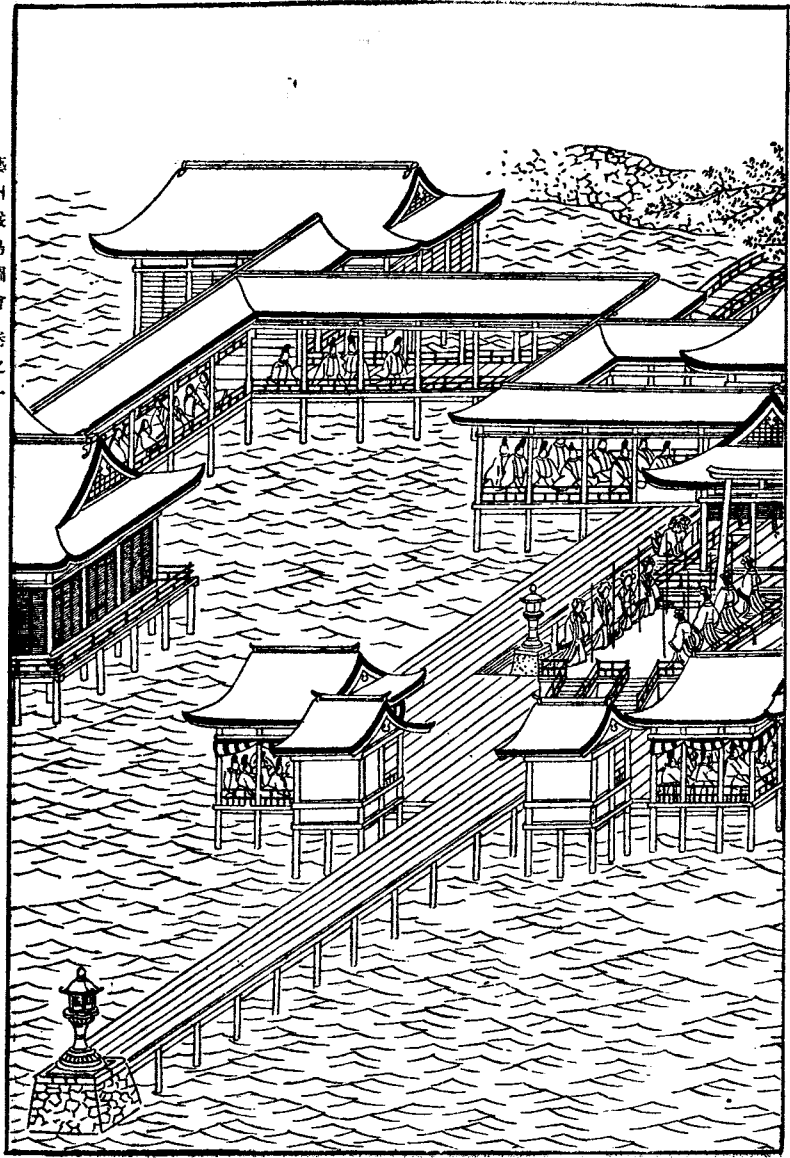
網、土御門宰相、中將通親、殿上人には中將隆房、辨兼光、御幸のことをうけたまはり行ふ。木工頭家則、この外は前右大將宗盛、以亮、重衡、参議の中將時實など、さては女房四五人ばかりさがたき人こそ、まゐる人おほからずとおほせど、さすがに船數おびたしく、みつの濱につかしたまふ(中略)彌生廿五日の申の時に、あきの國うましまといふところにつく。これにてみなうしほにて髪をあらひ身を清む。宮島ちかくなりけりと、きよき心をおこす。廿六日空のけしきうらゝかにて、神の心もうけよるこばせたまふにやと、めぐみもかねてしるし。日さしいづるほどに出させたまふ午の時に宮島につかしたまふ。神寶のふね尋らる。かねてまゐり設たるよし申す陰陽師の船暫くまたるゝ空のけしき、ところのありさま眼も心もおよばず。大唐の湖心寺もかくやと見え、神山の洞などにいりたらんこゝちす。宮島の有の浦に神寶とゝのへたてゝ御拜あり。社司狩衣など着たるもの神寶もちてまゐる。大幣に祓ひ清め申てまゐらす。時實の中將とりつぎてまゐらす。潮ひくほどにて御所へ御舟いらねば、はしふねにてぞおりさせたまふ。公卿御ふねにさぶらひて、宮じまの南のかた三間四面の御所つくりて、障子の繪ども海のかたをぞかきたる、うみのうへなぎさまで廊をつくりつゞけて、しほみたば御船をさしよせん支度をぞしたる御湯殿などありて、絹の御淨衣めしていでさせ給ふ。御所のひんがしの庭に白木の案をたてゝ、はごもをしきて白妙の幣をよせたつ。そのひがしに、唐櫃の蓋をあけて金の幣をおく。其西に薬座をしきて、陰陽師の座とす。神馬一疋たつ。左衛門尉信定時棟これをひく。北面などいまだはじめおかねば、御供には上達部の侍をぞ召されけ。隆房の中將御前にさぶらふ。

三具



再會人平觀在明





宮内少輔棟範役送をつとむ。御殿はてぬれば召使御杵を持て先にまゐる。廻廊のきたの濱をめぐりてまゐる。廊を通りてまゐらせたまふ。くらゐの御時は、一二町をだにも廷道をこそまゐらせしに、めしならはぬ御杵もいかゞとぞおぼゆる。上達部、殿上人、御供に候す。客神の宮にまづまゐらせたまふ。金銀の幣ふたさゝげ、白たへの幣神官とりて寶前に備へならべたつ。拜殿のうちほど、高麗の半帖一疊御拜の座とす。金銀の幣は、兼光の辨つたへとりて、隆季の大納言つたへ取てまゐらす。御拜終りて歸らせたまふ。祝師たまはる御琴一、御琵琶一、御拍子、横笛うけとりて寶前にならべおく。内侍共色々さまんにそうぞきて錦をたち着たり、縫ものせし眼も心もおよばず。御神樂をはりて大宮へまゐらせたまふ。御奉幣はて、御經供養あり。金泥の法華一部、壽量品、壽命經、御てづからかゝせたまひける。御導師公願僧正まゐりて、このよしを申あげらる。九重のうちをいでて八重の汐路をわけまゐらせたまふ。御志などきく人袖をしぼりあへす申上げるかづけもの一かさね、一包をぞたまはりける。げんしやうおふせらる法眼一人なしたまふ。神主景弘くらゐあげさせたまふ。宮島の座主阿闍梨になしたまふ。安藝守在經加階ひとしなあげさせたまふ。院の殿上ゆるさる。隆季大納言ぞ兼光に仰せける。御神樂やをとめ八人、きぬ一具、わたなどたまはせける。日くれて歸らせたまふ。上達部、殿上人の宿所こゝろをつくして設けたり。内侍ども、屋形をしつらひてぞおのゝすごしける。月のころならましかば、いかにおもしろからまし。月なき空をぞくちをしくおもひあひたる廿七日、空のけしきうらゝかに晴わたりて、残りの鶯おもはぬみやまの木蔭にかたらふこゑす。夜をこめて潮みつとて

御所のまへまでさしいりたる、まことにこの世の有さまとも見えす。供御などはてにしかば、御宮めぐりあるべしとて宮へまゐらせたまふ。今日は布の御淨衣をぞめしたる、國々の守どもまゐらせたるもの、宮のまへにはこびおく。廊のまへに樂屋をつくりて拜殿をたてたり。内侍ども老たるわかきさま、あゆみつらなりて御供まゐらす。とりつゞきて樂どもして御戸ひらきてまゐらす。それはてしかば、宮司、神人まで物をたまはる。廳官などぞわかち給ふ。内侍ども金をのべ錦をたちて、さまゝの花をつけて大口をきて、天樂つかうまつる八人ならびたり。天人のおりあそぶらんもかくやとぞおほゆる。その後からこまほこなど舞ふ。棹とれるすがた、めも心もおよばず（中略）夜にいりにしかば、こよひ御通夜あるべしとてまゐらせたまふ。内侍どもあつまりて、夜もすがら御神樂あり。更るほどに七になる小内侍あるに神つかせ給て、始は倒れふして時中ばかりたえいりにしを、となしき内侍どもかゝへて程へていきいづ。御神樂つかうまつるべきよし仰せられて、神主めしいでてさまゝのことどもまうさる。眼もあやにいかにとうたがひをなす人もありぬべきに、さしもいふかひなきものゝさまゝ法文などときて、御神のはじめてこの島にあとをたれ給ひしことはとて申す。きく人なみだをのこはずといふことなし。入道めしいでて仰らるゝことどもあり。これを入きかず、法華經の壽量品をたび／＼誦しける。額をかたぶけずといふことなし。或は氣高き女房うしろの障子にうつりて、寶殿に向ひたまへるすがたを見たるなど申人もあり。常にありとおほえぬ匂ひ、神殿のうちよりかうばしくほひこし、あまたおどろきさわざあひき。誠に高唐の神女は、かのやうたいにおりて、帝のゆめにいりて朝に雲



佐藤近宗實定

御小巖島請を

まむる番

實定公と後徳大寺大

臣の清なり歌不堪能

小於りまして三

槐尊位の法方

の當時どの

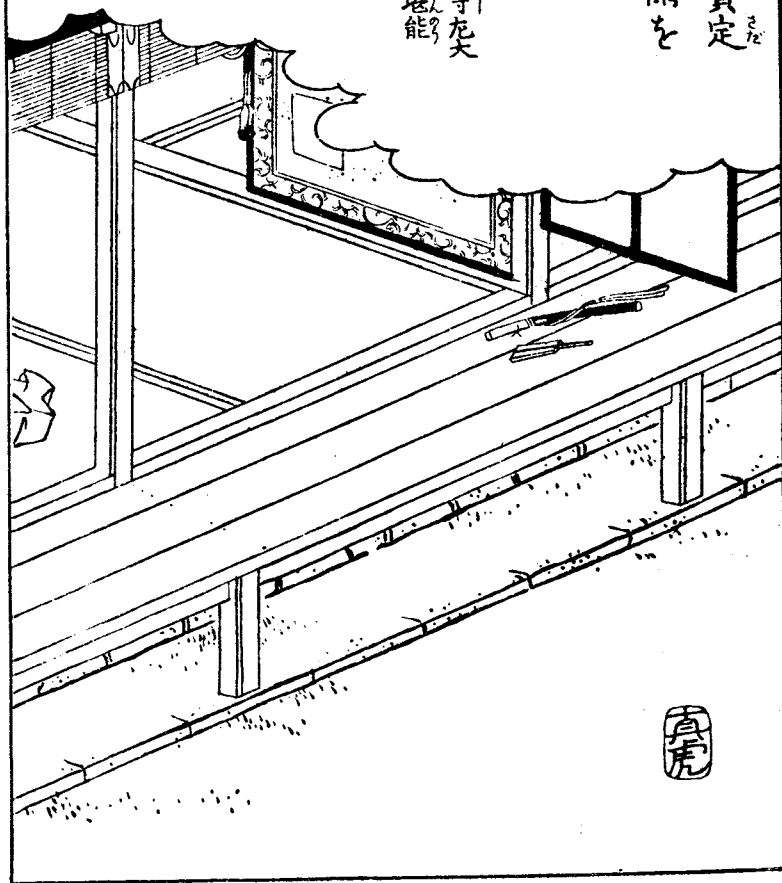
公小なりび

たまふれは

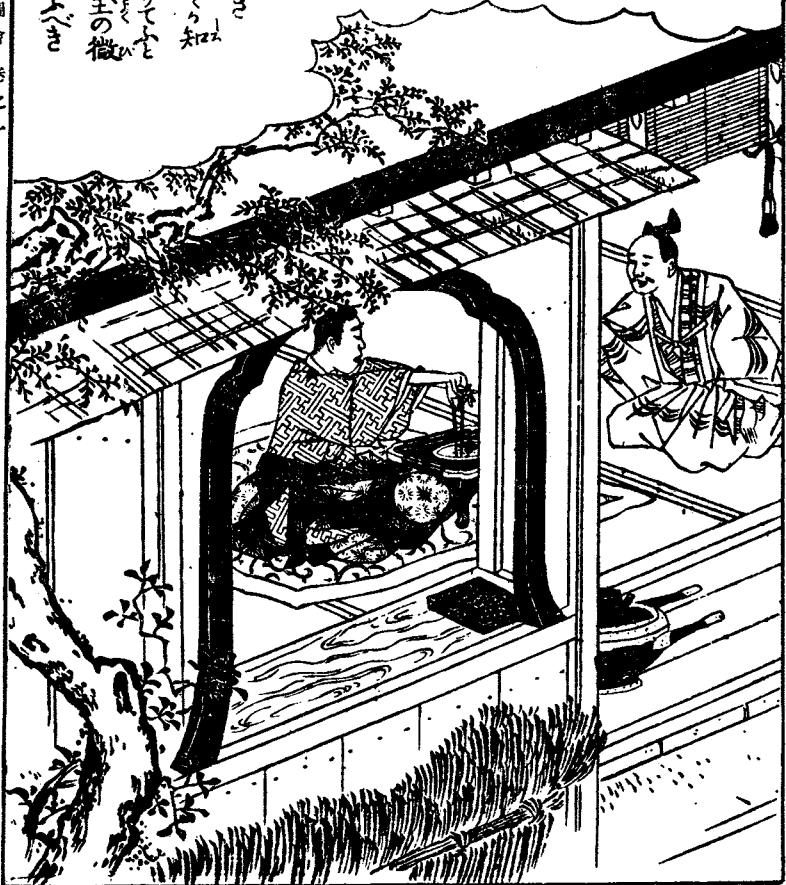
さりた

きれと

もせの



酒を母を  
 んえあふま  
 や名もな  
 花酒とよ  
 みなまひ  
 しくん名  
 なりの太  
 おとよ異  
 名をつら  
 れるひり  
 よー光明の  
 無名抄よこえうらさ  
 せかりのちげいんせう知  
 しめまらん時おとつておと  
 思とごまらん白王の微  
 瑕とわかるとをやりよべき



となり、夕には雨とならんと契りたてまつりけんあともかくやとぞおぼゆる。あけがたになりしかば、社の鶏こゑくあけぬとなふ。波の音もたかく。瑞籬をあらふは汐みつにや。白樂天のうしほのこゑは、来て耳にいるとつくりけるも、きゝては風情もたくみなりけるにやとかたがたとりあつめたる折からのありさまいひ盡しがたし。かくて明にしかば、御所へかへらせたまふ。廿八日、このわたりの浦々ごらんすべしとて、泉郎ども潛きせさせたまふ。からの花田のかりの御なほし、唐綾の白き御衣二、御大口たてまつらせたまふ御すがた、いみじうなまめかしう見えさせたまふ。浦づたひてさしまはして御覽す。まことに仙の洞もかくやと、龍宮土もこれをいふにやとおぼゆる處々のみおほかり、みるめなどもてまゐる時とばかり御覽じまはりて歸らせたまふ。辰の時にまた御宮めぐりありて、やがて御船にたてまつる島のうちも、おどろくしくさわぎあひたり。(下略)

○百練抄曰、治承四年九月廿一日、新院御幸嚴島第二箇度也。云々。

○古今著聞集曰、治承四年九月嚴島に御幸ありけり、御願文みづから御草ありて、殿下(普賢寺殿)清書せさせたまひけり。希代の事にや、かの御願文ことためたかりければ、後日に藏人宮内少輔親經表をかきて奉りけるとなん。

○同書曰、治承元年徳大寺實定大將を望み、成就せばいつくしまへ詣べきよし、心の中に願を立られる程に、十二月廿七日つひに左大將になられにけり。いつくしまの宿願も頼ありてぞおほえける。同三年三月晦日嚴島にまゐるとて出られにけり。大納言實國卿、中納言實家卿などもなひ侍ける。

この日、中御門左府も参りたまひたりけり。三條左大臣入道そのとき大納言なり。六條の太政大臣の中將にて侍りけるもおはしけるともなひ申されけり。此度の事にや、中將かの島の寶前にて太平樂の曲をまはれける。おもしろかりける事なり。

○源平盛衰記曰、徳大寺の實定は、大將を宗盛に越られて、大納言を辭し申されて山家の栖に簡居ありけり。(中略)御身かく召つかひたまひける侍に、佐藤兵衛尉近宗と云者あり。事に觸てさかしくしき者なりければ、何事も阻なくうちとけ仰合されけり。かの近宗を召て宜ひけるは、平家は桓武帝の後胤とは名乗れども、無下に振舞くだして僅に下國受領をこそ拜任せしに。忠盛始て家を興し、昇殿をゆるされし子孫なり。當家は閑院始祖太政大臣仁義公より已來君に仕へ奉り、代々既に大將をへたり。いま宗盛に越られて世に誼はん事、身の爲家のため人の嘲を招くべし。されば出家をせばやと思召いかゞあるべきと仰けるに、近宗申けるは、御出家まではあるべからず(中略)今はいかにもして入道の心を取せ給て一日なり共大將に御名を係させ給べき御計こそ大切なれ。それに取て安藝のいつくしまへ御参詣ありて穗に出て此事を祈申させ給べし。かの明神をば平家深く崇たてまつりてその社に内侍といふ者を居られたり。かの内侍ども毎年一度は上落して入道の見参に入ると承はれば、かゝる御事こそありしかなど語申せば、明神の御計もあり、また入道もいちじるき人にて思直さるゝ事もありなんと申ければ、近宗がはからひ然るべしとて、やがて御精進ありて嚴島へぞまゐり給ふ。四月二日いつくしまに着給ふ。神前にまゐりて社頭の景氣を拜したまへば、皓潔たる波月は和光の影を評ひ、蒼茫たる水雲は利物の風を帯たり。雲の楣、霞の軒、いくばくかは年へけむ。玉の

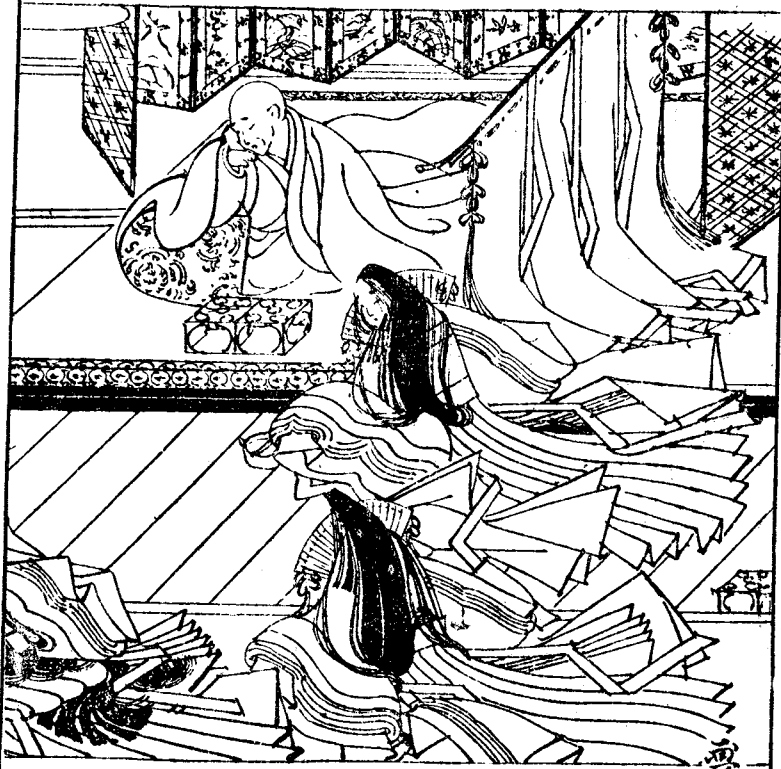
西八條殿

おて内侍

清盛公よきよし

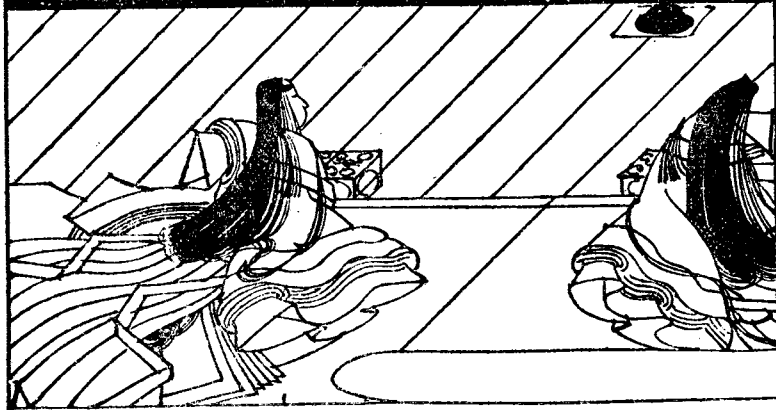
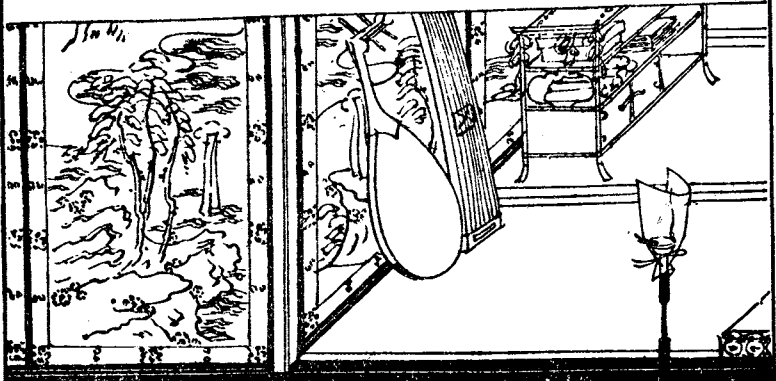
對面の圖

世の画玉乃公  
を面くた  
行杯の連ま  
りまの面  
用とせ  
か眼をい  
ろし  
本く肥き  
なり顔は



西八條殿  
清盛公  
おて内侍  
對面の圖

「ついでに、小  
 面りもよい  
 たぐとすりの  
 とうた載のい  
 ぶ人の人たけ  
 前おるとあさ  
 ると候ゆえ  
 ん然にあれも  
 この像、たゞくよ  
 う絵巻の遺物  
 によつて描写せ  
 ものをれ、真分  
 ぐといふ人も可  
 せん程伊川の事  
 今人は影象或一  
 髪不相似則所  
 是別人と画工の  
 ことを思はば  
 かみんのもふか  
 けまむいひま  
 一休



簾、錦の帳たのみを懸て日をおくり。遠國にも眺望やさしき名所とて、神明地を點じ跡をたれ人を利したまふこそたふとけれ。肩をさし袖をつらぬる内侍も、結縁うらやましく御覽すれば信をいたし歩をはこぶ。願望もすゑたのもしくぞおぼしめす。御參籠は七箇日なり、其間内侍ども、常にまゐりて今様朗詠し、琴、琵琶などして旅の御つれくさまく情ある體に慰め奉る。(中略)七日過ぬれば都へ歸りのほりたまふ。内侍ども一夜の泊まで御供申て、其夜は殊に餘波を惜み奉り、明ぬれば暇申けるを、實定宣ひけるは、なごりは尋常なりといひながら、これは理にも過たり。何かは苦しかるべき都までおくりつけたまへかし、またもおもふ見參もいつかはとおぼえて、あかぬ思ひの心元なきぞと仰られければ、内侍どもさらぬだに忍びがたき餘波に、かくこまくと宣ひければ、都までとて送り奉る。徳大寺へ相具し給て兩三日勞りて様々もてなし、引出物たまわりける。さて内侍暇給て下りけるが、入道の見參に入んとて西八條へぞ參ける。入道出會ていかにと問たまへば、徳大寺大納言殿今度大將に漏させ給へりとて、御祈誓のため遙々と殿島へ御參籠七箇日、尋常の人の社參にも似させたまはず、思召入たる御有様もたく見えさせたまへる上、事に觸て御情ふかし。内侍ごとに不便にあたり奉給つれば、かたゞ御餘波をしくて、またもの御參も難有ければ、都までおくり付たれば、様々相勞れ奉て色々御引出物たまはりて下り侍るに、いかでかくと申入さるべきとて參てこそと申せば、入道もとよりいちじるき人にて、涙をはらくと流したまへり。やゝありて宣ひけるは、近衛大將は家の前途なり歎たまふも理なり。夫に都の内に靈佛、靈社其數おほく御座。この佛神をさしおきて西海はるかに漕下り、淨海が深く崇たのみ奉る殿島まで參詣せられけるこそ

いと惜おぼけれ。明神みやごじんの御照みあ覽らん測はかがたし。其上そのうえ今こんど度は理運りうんなりしを、入道はからひが計かりに宗盛むねもりを擧あげし申ましたるにこそ計かひ申まべしとて、けしからず泣なたまへり。内侍ないしどもも既もてあまひ、引出物ひきだなんど給たまひて下くだされたり。其後そののちやがて重盛しげもりの左ひだりにおはしけるを辭じし申まて右みぎにうつし、實定卿みさだせうを擧あげし申まて左大將さだしやうに成なし奉ほうる。いつしか同おなき五月八日ごごのやちひ御み悅よろこ申まあり。今日こんにち佐藤兵衛近宗さとうひやうねを左衛門尉さゑもんのかみになされける上うへ、但馬國木崎たじまのくにのきさきといふ大庄おほしやうを賜たまはる。神明しんめい忽たちまちに御納受みまけ、尊たうときに付つても近宗ちかむねがはからひ神妙しんめうとぞおぼしめしける。「割註わりぢゆ」按おふに、實定卿みさだせう嚴島詣いづくしまゆきのこと、著聞集ちやうもんしゆには心願こころがねを立て治承元年ちやうしやう元年左大將さだしやうに任にんぜられ、同じき三年さんねん參詣さんげいありしこととして、本段盛衰ほんだんせいすい記き及び平家物語へいけものがたりの所載しよざいとは頗おび参詣さんげいの先後せんごあり、いづれにかあらん、見ん人みんひとそのよきにしがへ。」

○山槐さんかい記き曰い、治承三年六月七日ちやうしやう三年六月七日前まへ大相國おほさうこく（花山院はなさんいん）令あまの詣いづくしまニ安藝伊都岐島あまのいづくしま給たまふ。自みづか一昨日いつさくじつ御精進ごしやうぢん但魚味たにぎし不は憚は也なり。丹波守行雅侍從兼經たんはののりみまさざむらひかねつね、藏人大大夫くらうのたふ泰房判官たいぼうはんぐわんのぶ信のぶ、民部大夫みんぶのたふ政清まさきよ、監物けんぶつ康識かうしき、左衛門尉さゑもんのかみ信直のぶただ、右馬允みぎうまのり高清たかきよ、令あまの着き縮衣しゆくい給たまふ。云々。出彼經供養いでかみつねいよう并ひら内侍ないし（巫也みこ）等ら給たまふ物料ぶつぎやう也なり。卅石可忤しやくしやくかた昇あり仍欲參内之處あがりたうしやうのち。右少辨みぎせうべん光雅みつあや令あまの史し遂すい四し無申な旨しめ者なり、仍延引參内よほてんいんさんない。云々。廿二日にじふににち令あまの還向かへらしめ給たまふ。云々。

鹿苑院殿嚴島詣記

源貞世作

左ひだりのおほいまうちぎみ、いつくしままうでのことあり。（中略）むかしも嚴島には高倉院御幸たかくらゐんのみゆきなり。平たいらのおほいまうち君きみもたび／＼まうでられし例たとひも侍はんべけめども、このたびはひきかへてめづらしき御姿みづかたどもにて、花田色はなだいろに目結めゆひとかやいふもんを染そめて、袖口そでぐちほそく裾すそひろきうちかけといふものをおなじすがたに着きたまひ、赤あかきおびに青色あいらうの腰巾はこし、赤色あかいろのみじかき袴はかまなり。御供みごとの人々ひとみ



なみさきばかりなる金がたなどもさしせらる。康應元年三月四日、夜ふかく都をいでさせ給ふその日の午の時ばかりに、攝津の國の兵庫の津につかされたまひぬ。御座の舟に参るべき人々かねてさだめらる。

修理大夫

右京大夫

日野辨

高山左近大夫將監

同七郎

(關口)今川修理亮

眞下

高山十郎

このほかは、おのくの舟にてまゐり侍り。

高山衛門佐

山名播磨守

細川淡路守

土岐伊豫守

探題伊豫入道

今川越後入道

同右衛門佐

同中務大輔

伊勢衛門入道

曾我美濃入道

朝倉因幡守

若王寺別當

古山珠阿

松壽丸

士佛

九日備後の國尾道といふところのしに、くぢら島、糸崎、いくちの島などいふ浦々、北にあたりて見ゆ。この處々はいにしころ、筑紫へくだり侍しときとほり侍りしなりけり。この南に伊豫の三島はるかにかすみたり。今夜は安藝の國高崎といふ海べたに御船をかける。十日またこぎ出させたまふ。三津風、早やま、地内の海、神代、日呂久禮、畑見、かま刈の迫門、かやうの浦々すぎさせたまへり。おんどの迫門といふは瀧の如く潮はやく狭きところなり。船どもおし落

されじと手もたゆくこぐめり。

ふな玉のぬさも取あへず落瀧つ早き汐瀬をすぎにける哉

豊崎などおしすぐる程に、また夜に入て子の時ばかりにいつくしまに着せ給ふ。御社のうしろに黒木の御旅所をつくれり。今夜は舟のまゝにとまりたる人も多かるべし。十一日御社ふしをがませ給て、御前の濱の鳥居のほとりより、かごにて御船にうつらせ給へり。御社の廊々、拜殿などに巫、内侍やうの神司、女どもたちこみたり。かもめのむらがれ居たるにいとよく似たり。緒方とかやいふはおほたき川とて、安藝と周防のさかひの川のすゑの海づら過て、周防の國のうちに室積などいふ處々北に見ゆ。屋代の島、伊豫の國道前の山など、南にあたりてかすみつゝ、波のうへもうちけぶりたり。夜船はこゝろもとなかるべしとて、神代といふ海上に御とまりなり。

(下略)

○源貞世(今川了俊)道行ぶりに曰、長月廿日いつくしまにまうで侍る。この島は、峯三四ばかりそびえあがりて、深山木の年ふりたるうちにまじりて、老たる松の岩のうへに生かたぶきつゝ、磯際までしげりたり。かの御社のやうは、すこし戌亥にむかひたり。廊の下まで潮みち入り。鳥居は海の中にたてり。島の四方に入江ともあまたありて、見處かぎりなく侍るなり。百浦侍るとぞまうす。あはれ心閑にて此あたりこぎめぐりつゝおもふどち見侍らましかばと、まづ都の友も故郷のおやもこひしく侍るかな。彌山、瀧本などいふ所この浦なれども、日くれぬべしとていそがはしげにすゝめられしほどに、見すなりにき。さてまかり申侍て御所のはまこぎいでて、佛舍利(東大寺葉室)海に

入たてまつりぬ。此度の祈なるべし。夕日にむかひてこぎわたるほどひくしほに向て船おそく侍るは、磯際のぬるみにかけて侍りしなど船子どものいふを、などてかくはいふぞとたづね侍りしかば、かやうに潮のみちひの早き時は、磯際の潮のさかさまに流侍るほどに、船のこぎよく侍るなり。ぬるみとはよどの事を申すといふ。

いそ際のぬるみにかけて出し舟のはやくしほみちむかふほどなさ

此浦は四方に山々うちかさなりて、いづくを潮のみちひも通ぜんとおぼゆる海中にこの島も侍るなりけり。誠に海のあるじの御座所とおぼえて、この世の中とも見え侍らず、かへりてすさまじきまでおぼえし。(下略)

○豊鑑曰、秀吉公中國を経て名護屋におもむきたまふ。安藝の廣島には毛利住所なれば、一日二日やすらひたまふ。近ければいつくしまへ詣たまふ。御社は北にむかひ海を望み、廻廊、舞殿など潮干がたの白沙に作りめぐらしければ、潮のみち來る折からは板敷のひたるほどにさしこみ、さど波よすれば、たゞ波の中をぞありく如くなる、その粧ひいふはおろかなりぬべし。

○正應五年八月十日奉納和歌。

海邊霞

なにはがた波はおよばぬ濱松の梢をかけてたつ霞かな

權中納言爲世

梅風

もと見しに花もかはらぬ匂ひかな春やむかしの梅のした風

權中納言爲方

春 曉 月

いりやらでやまのはちかき月かげのかすみにくもる春の明仄

權中納言俊定

雲 間 花

月はいるみねの雲間のあけがたに色見えかはる山櫻かな

從二位隆轉

岸 山 吹

暮かゝる春のかさしにおりはへて波こそ岸にさけるやま吹

法 眼 玄 承

關 子 規

しばしとてこ名をもとめよ子規なきつゝこゆる須摩の關守

左近衛中將爲首

浦 五 月 雨

眞袖ほす隙こそなけれあま衣うらかきくもるさみだれの空

入道中納言公雄

芦 間 螢

野澤なるあしの葉末をふく風に見えみみえずみ行螢かな

從三位兼行

初 秋 風

たが爲とわきてはつげぬ秋風にもよほされぬるわが涙哉

從三位重經

露 知 秋

いまよりの露こそあらめ草葉にもあらぬ袂のなにしをらん

右近衛中將實躬

近 鹿

# 豊臣太閤清社奈の圖

逸史曰文祿元年四月太閤抵筑

前嚴島祠駐師禱之令左右取鏡

一擲祝曰投而多面以得志矣揮手

一擲每錢皆

大開大喜

庫蓋覆

西字云

逸史曰

豐公似

蘇我教書

故智集

公之不學

豈知史

冊上

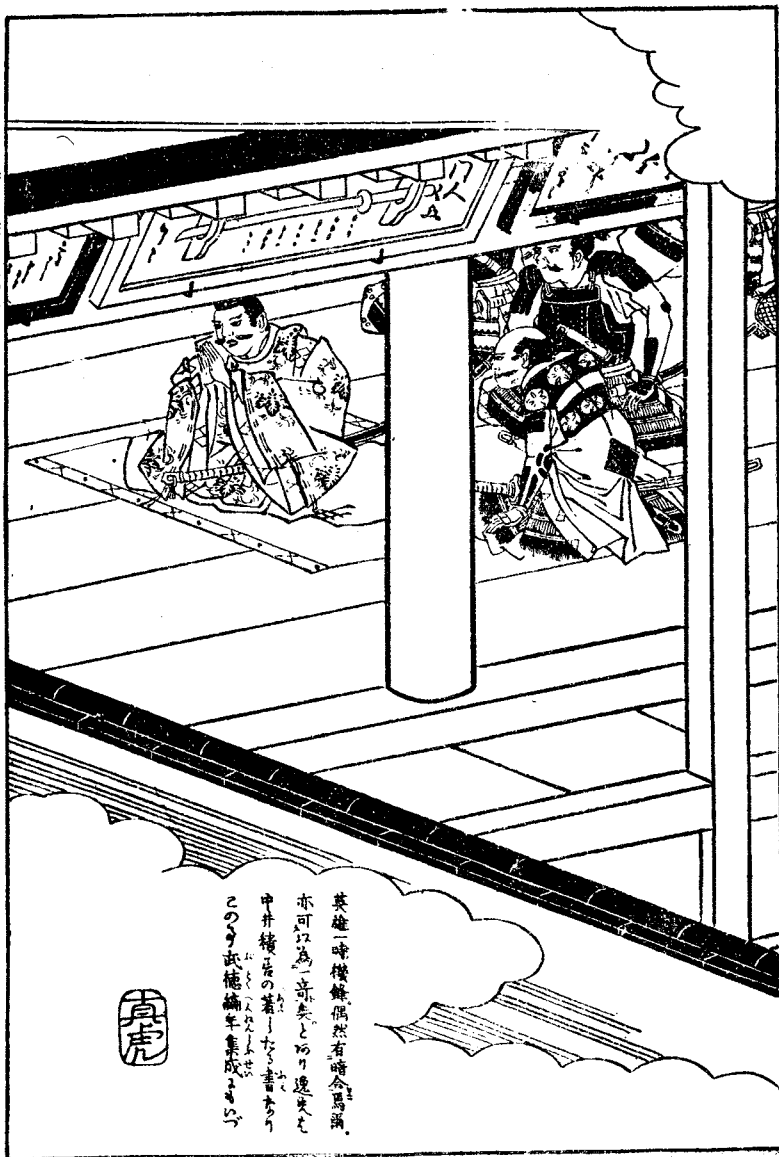
有是

專機

蓋

紅師衆相傳觀呼  
隨納錢于神  
拈令錢作





英雄一時權歸，偶然有暗令焉。亦可以為一奇矣。と有り。遠史に中井種正の著したる書あり。この書武徳編年集成ともいふ。



身にさむき軒端の山のあきかぜに猶つま戀のさを鹿の聲

前權僧正良覺

月 前 舟

やそしまや浪路はるかに月はれていそぐ舟人よはに漕ぐなり

修理大夫實時

杜 紅 葉

うつりゆくけしきの森の梢にぞしぐるゝほどの色は見えける

前關白家一條

夜 時 雨

しぐれゆくとどひとすぢの雲ならで月をもおくるよはの山風

津守國助

浦 千 鳥

むら雲のたゞよふ末の友ちどり月すむかたに浦つたふなり

大藏卿

雪 中 松

しばしとて嵐ものこせをかの邊の松のうへなるけさのしらゆき

左馬頭定成

山 路 嵐

梅が香をやまぢの末に吹おくるあらしや花のしるべなるらむ

少納言季長

旅 泊 夢

ちかゝらぬ浪のうきねのとまり船夢路はるかに都をぞ見る

沙彌明覺

寄 衣 戀

うしやたどおなじつらさのなみだのみかゝるへだての中の衣手

左近衛少將隆教

寄 玉 戀

軒端のきばよりこぼるゝ露つゆのしら玉たまもしのぶにあまる色いろやみゆらん

侍 從 爲 守

寄 書 戀

そよといふたよりもかなし萩はぎの葉はの風かぜのつてなるつゆの玉たまづさ

玄 輝 門 院 少 將

寄 舟 戀

松まつしまの渚なぎさによする泉いづみ郎らう小舟せうぶねみるめもかれて漕こぎかへれとや

新 院 新 大 納 言

寄 貝 戀

うきてのみたゞよふ波なみのうつせ貝がひこ心こころくだけでなほやうらみむ

右 近 衛 中 將 親 平

浦 鶴

かけこぼる浦うらわの月つきのあけぼのに松まつ風かぜさむくたづも啼ななり

散 位 親 範

磯 鷗

なには江えやいその松まつかぜこゑくれて洲すさきのかもめ波なみになくなり

舜 忍 法 師

夕 述 懷

經へにけるかむなしき月つき日ひしたはれて夕ゆふべごとははものおもふらん

右 近 衛 中 將 爲 實

曉 懷 舊

さてもわれむかしはいつもわすれねど寐ね覺ざぞおもふ限かぎなりける

右 近 將 監 政 秋

壽 量 品



西行法師八名地<sup>めいやく</sup>旧<sup>しゅう</sup>跡<sup>せき</sup>を<sup>しりぞ</sup>歴<sup>れき</sup>遊<sup>ゆう</sup>して  
此島へも来り月とて詠<sup>よ</sup>哥<sup>か</sup>の感<sup>かん</sup>  
慨あり——こと山家集に見えらる

哥ハ本文よのど



せめてなほたゞもとよりのいつはりさをとりしらす命なりけり 沙門昇覺

普門品

およぶべきかぎりもあらじ深き江にみをつくしてもたてし誓を 藤原仲光女

玄佛本願力

花の名をそれと聞ても夕がほの光は露のあきぞまゝなる 漸定

社頭花

しろ妙のいろをかさねてさく花にゆふかけそふるしめのうちかな 禰宜鴨祐治

社頭月

まもるべきかけとたのめばいつくしま神も月にはてらしみるらむ 明玄

社頭祝

せめて世をまもるちかひやいつくしま浪の外にも風ぞのどけき 従三位經守

こは、散位藤原親範の宿願によりて奉納せしところにして、なもいつくしまのだいみやうじん、し

んぢうのそまうかなへさせおはしませといふ、三十三字を冠としてよめる歌どもになん。筆者は藤

原經名、小序は少納言季長つくれり。其文は煩はしさに略せり。

山家集

安藝のくにの一宮へまゐりけるに、たかとみの浦といふ處にて、

風にふきとめられて程へければ、苦ふきたるいほりより月のもりけるを見て

浪の音を心にかけてあかす哉苦もる月のかけを友とて

西行

まうでつきて月いとあかくてあはれにおぼえければ

もろともに旅なる空に月も出てすめばやかげのあはれなるらん 同

風雅集

九月十二日の夜いつくしまへまゐりけるに、備後の瀬といふ處にて海邊の月といふことを

同

あたら夜の月を獨ぞながめけるおもはぬ磯に浪まくらして

藤原公重

九州道の記

それより巖島ちかくなりて社頭を見るに、鳥居はうみのおもて二町ばかりとおぼしくて立たる、廻廊も柱はなみ潮につかりて

あり、ふねより見て、

遠島の下津岩根の宮はしら波のうへよりたつかとぞ見る

玄旨法印

このうたをかきて、當島宮司棚守左近將監方へつかはしけると、かくありて月になり侍れば、

立出てふくるまで見るに、汐干しほみち眼のまへにありて、汀二三町ばかりもをち方になりぬ。

みつしほはたゞ大海のいづみ哉と、宗祇賢作なり、ことわりなるかな。(下略)

みな月三日いつくしまにて

さすしほも光をそへて島の名の宮居すゞしき夏のよの月

似雲法師

同夜、わた殿の百八燈ををがみたてまつりて

ところからたつの宮居もうかぶかと思えてつらなる浪のともし火 同

やはらぐるひかりもたかき宮じまの神にあゆみをはこぶもろ人 中納言持豊

たゝへこと葉

僧 海 量

かけまくもあやにかしく言巻も、あなにゆゝしき伊都岐しま、ひめのしづまりいますなる、安藝の海いつきしまの大宮のよそひはも、しら波のうちさらす濱邊ちかく、やまのすそみひろらかに、したつ岩根に宮柱ふとしきたて高天原に千木たかく、瑞の大明いらか神さびたてり、おほん御前のうてなひろくめぐり、ほそ殿長くつらなり、豎に横にたか橋うちはしかけわたし、右に左に石垣玉がきひきまどへり。かなたこなたたかき山ひくき御門、たかどのゝはさまゝ、残る隈なく大床の下までうしほの満来るさま、世にたぐひなくめでつべし。月のかけ燈のひかり波にうつる虚空にかゞよひ、心のちりも拂ひつべし。いづれの世いかなる人のめではじめけん、みちのくの松島、たにはの道の後なる天の橋立、このいつきしまの三つを世にひでたる名くはしきところなりと、人ごとに言繼かたりつぐめり。然はあなれど、わが皇國のひろきかずもかぎりぬ名くはしき處々、山のたかき河の大き、野のひろき原のふかき、島のこゝらならべる谷の八十隈めぐらへる、巖のけはしくそびへたる、石の奇しくあやしき、あるは神の森、佛の庭の静けくかそけく、またはみやびかににぎはへる、道々のたゝすまひ一かたならず、あるはとほしらくおほらかなる、あるは雄々しくゆたかなる、あるはうるはしく長閑なる、あるは清らにこまやかなる、そのうちむかふ心おなじからず、そがうへ四つの時のうつりかはる、をりにふれ時にしたがひ、めづべき事の異なるに、また人ごとによしとふことも、こゝろの同じからざれば、たれやの

人か、そのけぢめを定むべき。しかはあれど、またおのもくともくめでおもへることを、言  
擧すべからざるにあらざれば、今こゝろみにいはじ、われ六十あまりのくぬちを廻りけるに、う  
ち見るに眼をよるこぼしめ、心をなぐさましむるに、まこと世にたぐひあらじとおもへるは、布  
目の高根、あふみのうみ、紀の國の熊野なる那智の瀧なるべし。なほうまくおもふに、阿波のな  
るとの盛なるいきほひ、吉野のさくらの長閑なるよそひたへなりといへども、多くの國中にその  
たぐひなしといふべからず。そはとまれかくまれ、今このいつきしまの世にひでたることをあげ  
つらはじ、松島、はし立、嚴島の三つは、をかしくゆたに奇しく、怪しき類ひにあらず、清けく  
こまやかにうるはしく、のどかなるかたにして、其地をふみ、兎見かう見徘徊、ふねうけすゑ  
こゝかしこ潜めぐり、眼をよるこぼしめ心をなぐさましむるに、世に秀たりとめではやさんこと  
うべなり。さて三つの内たがひにそのふりくこそ異なれ、いづれおとりまさりはあるべからざ  
れど。松しまはし立は、浦邊島回にそのたぐへるところなきにあらず。此しまのみはしのもと大  
床の下まで、うしほの満來るよそひ、まことに世にたぐひなき名ぐはしきところなりと、めでは  
やすべきにこそ、うたよみしていへらく、

宮柱ふとしくたてるみづがきに汐のみちくる島ぞこの島

わたつみの神の宮かもいなをかもいつきしまべのかみの瑞籬

みづかきにみちくる汐にともし火のかけぞうつれる乏しきまでに

朝にげに見れどもあかず神風のいつきしまひによする白浪

安藝のうみいつきしま根の動なくさかばえゆかないく萬代に

安藝のいつくしまにて

みつしほはたゞ大海のいづみかな

おほ海のみづの細江や朝がすみ

みつしほに月よりうへの宮居かな

龜のうへのやまかかすめるおきつふね

満しほにうかぶやかめの花のやま

なみや月かげあらひけりいつくしま

この餘、大内義隆の嚴島千句といふ連歌あり、陰徳太平記に載たり。こゝには略す。

宮じまや燈籠の火にあけやすし

燈籠やいつくしまやまなみの花

みや島や廻廊に夜のあけやすき

松の雪うみも彩色やいつくしま

としにたついつくしま根のよつの鹿

梅が香や眠らずしろし宿直禰宜

わが恵方おほしまつしまいつく島

宗

紹

宗

玄

遊

松

共

支

美濃

伊勢

涼

重

洛

野

祇

巴

長

仍

行

院

角

考

菟

瀨

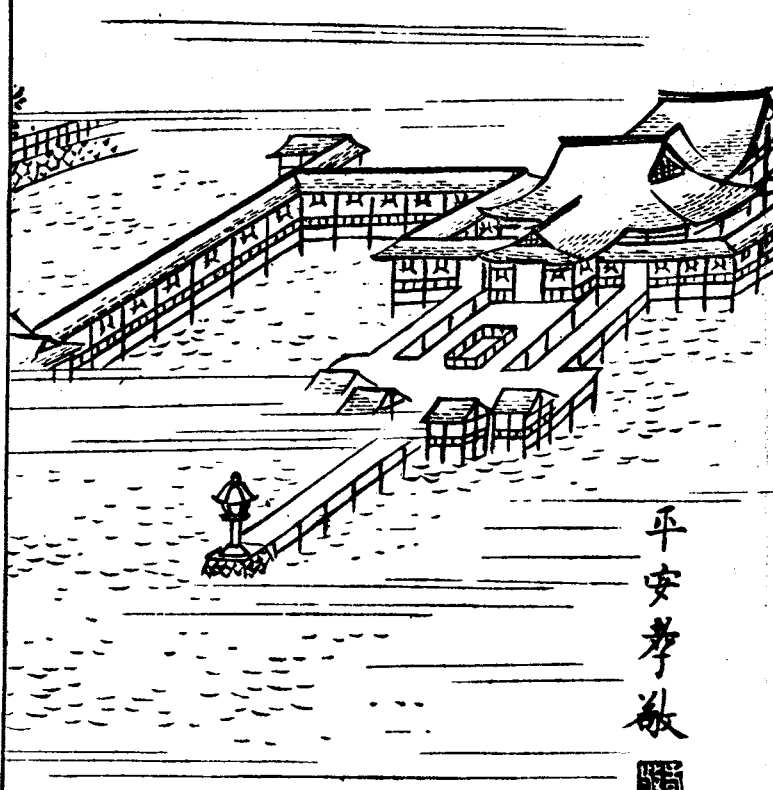
々

坡

更

社頭しやとう

明燈めいとう

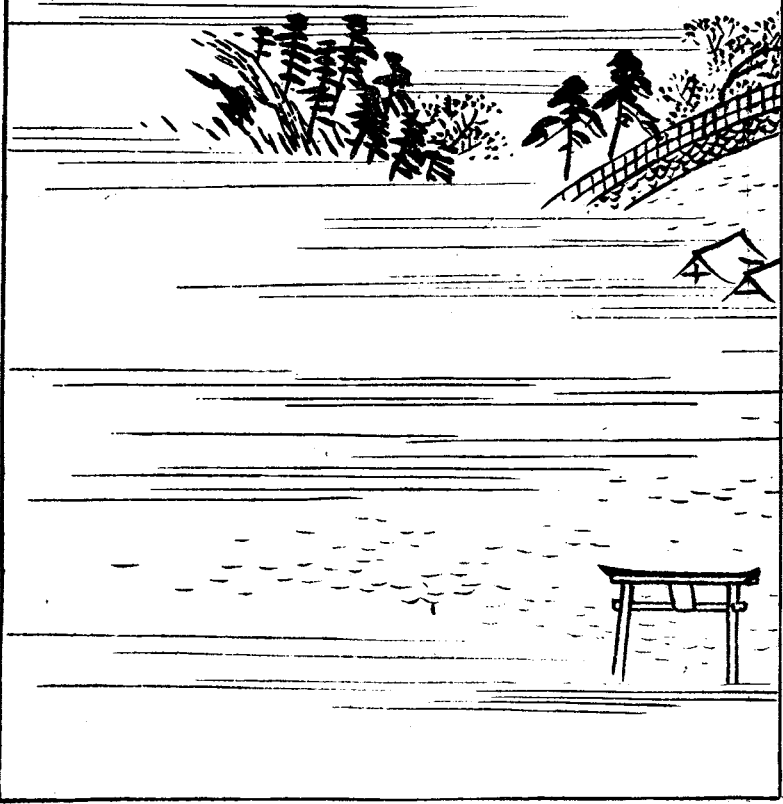


平安孝敬



あはれ  
たかい  
づの  
あま  
うけず  
先丁  
光久一き  
こやの  
せゆ  
大

園田清





硝子の國やわか葉のいつくしま  
尾張露川

水是潮兮山是島  
山光相映落波瀾  
釋白休

不離當處神仙境  
百八廻廊一社壇  
德輝嚴島大明神  
大德寺釋  
江月

後青山兮前水濱  
今宵有心萬燈閣  
百八廻廊月一輪  
題榜壁間

寬永丙子春欲去藝陽遊伊都岐島口謔一首  
神聖靈蹤益壯哉  
石川丈山

恭惟市杵島姬命  
廟貌巋然浮海水  
怪看蜃氣吐樓臺

同  
江山頗係念  
行樂賞春晴  
俯看魚龍躍

仰聞猿鶴鳴  
月昇燈影淡  
風靜磬聲清

要永別雲水  
留詩記姓名

嚴島海雲

市杵姫祠名久聞  
大師懇禱意慇勤  
向陽林子

誰分蓬島移西海  
神德添輝五色雲

社頭明燈  
〔割註〕八景の二〇八景はいはゆる社頭明燈。大元櫻

花。瀧宮水瑩。鏡池秋月。御笠濱暮雪。谷原粟鹿。

有浦客船。彌山神鴉。等なり。」

汐みてば波にうつるも數ぞ見るこの宮じまのみやのともし火

正二位通躬

波間より見えて數あるともし火に宮居もしるしいつくしま山

(梅月堂)宣阿

明燈やことにとしたつはじめの夜

野坡

御燈やたゝふるばかりさつきやみ

風律

嚴島雲晴飛繡囊。

二品親王堯延

神燈波面幾千點。

添着和光夜々明。

悅峯

好山朶々鏡中看。

百尺樓臺海氣寒。

黃檗

夜有神燈光映波。

却疑星斗落欄干。

僧獨

鴉定鶴棲歛夕陽。

紅燈百八點長廊。

麟

夜潮推送萬波色。

天女分來無盡光。

嚴島圖會卷之一終